

カリフォルニア州カーン郡における羊の長距離移牧の継続

斎藤 功

筑波大学名誉教授

カリフォルニア州では入植当初から大土地所有が卓越した。サンホワキンバレー南部では大土地所有の土地利用の一形態として羊の放牧業が行われた。その羊飼いとして重要な役割を果たしたのがピレネー山地西部を故郷とするバスク人であった。シエラネバダ山脈を越える大回遊移牧はなくなったが、片道400マイルを超えるような羊の長距離移牧は現在まで続いている。本稿はカリフォルニア州の最大の牧羊地であるカーン郡を対象にして長距離移牧の実態を現地調査によって解明したものである。その結果、盆地床のアルファルファ畑放牧、丘陵地の自然草地、モハーベ砂漠、山地放牧という循環的な長距離移牧は、バスク系牧羊業者によって継続されていることが判明した。しかし、カーン郡では羊数や放牧業者数は環境保全のための放牧地制限、牧牛業への転換、後継者の不足等により減少してきた。しかも、過酷な労働を要する羊飼いはバスク系から1970年代にペルー人などのヒスパニックに変わった。

キーワード：大土地所有者、バスク系羊飼い、羊の長距離移牧、放牧地制限、カリフォルニア州カーン郡

I はじめに

家畜を夏季に山地に上げたり、冬季に平地に下ろしたりする移牧は、地理学では早くから注目されてきた。Peattie (1936) の『山地地理学』ではフランスのダフィース地方(アルプス)やピレネー山地の移牧が土地利用の高距限界の研究とともに解明されている。そこでは羊群の移動の季節性と標高の関係が解明されている。近年、白坂らは移牧の文献を渉猟するとともに、定住集落からの家畜の移動方向を検討して移牧の概念を明確化した。そしてイタリア側から3,017mのシミラウン峠を越えてオーストリア側の放牧地に移動する羊の伝統的移牧の実態を明らかにした(白坂・鷲山, 2006)。しかも、乾燥したアルプスの南から、湿潤な北斜面への国境を越える移牧の起源が、文献的に中世まで遡り、考古学的に紀元前まで遡ると推察している。漆原らは社会主義体制の崩壊とEU加盟という社会変革が移牧に与えた影響をルーマニア、スロベニア、ブルガリアで考察し、

カルパティア・トランシルヴァニア山脈を事例に羊の過放牧による土壌侵食や環境汚染の実態を報告し、植生の回復についても地生態学的に明らかにしている(Urushibara, 2006; 漆原, 2012)。なかでも白坂は標高950mのジーナ村から夏季(6月中旬から10月中旬)に山地放牧し、冬季(10月から4月)にバナート平原に移動する羊の二重移牧について詳細な報告を行っている(Shiraska, 2007)。

一方、氷河研究者らも高所における移牧に関心を示している。小野は文化人類学者の貞兼と協力してヒマラヤのランタン谷におけるヤクの移牧の実態をツォーバ(グループ)別棲み分けとして解明している(Ono and Sadakane, 1986)。近年、それらの成果を踏まえ、渡辺(2009)はネパールにおける羊の移牧を牧畜家族に焦点を当て、文化生態学的視点から詳細な報告を行っている。

これら旧大陸の移牧の研究に対し、新大陸の移牧の研究は多いとはいえない。White (1926) はソルトレイク地域における羊の移牧を取り上

げ、それがモルモン教徒によって始められたこと、及びその移牧が協同組合ごとに山地（夏の放牧地）と砂漠（冬の放牧地）に加え山麓の放牧地を利用していることを明らかにした。一方、Hofmeister（1961）は遊牧と移牧に関する欧米の文献を吟味した論文で、夏の山地放牧と冬の放牧地の間に春と秋に山麓部の自然草地に放牧しているソルトレイク地域を複合移牧の事例として分析している。そして移牧とは「標高、気候、植生の異なる二つまたはそれ以上の季節的に利用する放牧地に畜群を移動または輸送する半遊牧的畜産業」だと定義した。本稿で扱うカリフォルニア州のカーン郡の長距離移牧も複合移牧といえる。Rinschede（1988）はヨーロッパ山地とアメリカ山地の移牧を論評した論文で、アメリカの移牧はヨーロッパより長距離で、鉄道やトラック輸送が多いことを示唆している。しかし、個別の事例については触れていない。

ところが、アメリカ西部における羊の移牧には主としてバスク移民が当たってきたことからバスク研究として焦点があてられてきた。Douglass（1977）はバスク地方が小農地帯で、家を継ぐのは一人で、それ以外は村を出て働く慣習があり、羊飼いは多様な職業の一つであることを明らかにした。しかも、アメリカ西部において羊はメキシコ領時代の伝導団によって自給自足のために飼育されたが、カリフォルニアの併合によって羊産業が重要になったとした。すなわち、1850年代に羊産業は牛よりも安定して発展し、1862年の早魘がそれを決定的にした。その上、羊産業がアルゼンチンなどの南米経由のバスク人によって飼育され、その後もバスク地方から直接渡米してきた人々が重要な役割を果たしたという（Douglass and Bilbao, 1975）。開拓初期、肉用羊を鉱山に運んだルートを解明したもの（Wentworth, 1948）もあるが、それは移牧といえるものではない。

本稿ではバスク系移民によって受け継がれてきた羊の長距離移牧が行われ、カリフォルニア州最大の牧羊郡であるカーン郡を対象に牧羊業者の実態と変容を地理学的に解明することを目的とする。地理学的というのは、長距離移牧のルートを図化し、土地利用の実態を地籍図レベルで解明することである。

移牧の実態調査には牧羊業者への聞き取りが欠かせないが、彼らが牧場の拠点にいる時は繁忙期であるのでインタビューには限界があった。そこで牧羊業者と接触できない場合には、羊群を放牧している羊飼い（牧童）への聞き取りで補った。また、対象地域の新聞記事を「バスク」「羊飼い」としてファイルしてあったビール記念図書館にはお世話になった。さらにPaquette（1982）の著書は、フランスやスペインから羊飼いとしてカリフォルニア州のバイカーズフィールドにやってきた初期のバスク人の動向を明らかにしたもので高く評価できる。

II 大土地所有者と長距離移牧

1. 大土地所有者

1850年9月カリフォルニアが合衆国の一つの州になったとき、スペインとメキシコ時代に確立された経済は牧畜であった。1850年のTrespass Actは家畜を自由に放牧し、農耕民が作物を守るため家畜の侵入を防ぐ柵を作るというものであった。しかし、1874年にバイカーズフィールドでもたれた農耕民と畜産家の会議でNo Fence Lawが認められた。それは畜産家が牧柵をつくるものを義務づけたもので、カリフォルニアが小麦と大麦の大産地になる契機となった（Boyd, 1997）。

アメリカ西部、とくにカリフォルニア州は大土地所有者が多いことで知られている。メキシコ領時代にはランチョ（Ranchos）と呼ばれる世襲封土が与えられていたからである。ランチョ（牧

場・農場)では牧牛が主要な生業であった。1846年アメリカ合衆国に割譲された後の土地利用も牧牛が主要な産業であった。牧羊は1850年代にはじまり、1860年代にブームになった。牛と同様新しい品種が導入されたという(Liebman, 1983)。

アメリカに移民したポルトガル人は金鉱等で働いた後、農業に転身する者もいた。その一部は羊毛の積み出し港ストックトンで誘われて羊飼いになるものが多かった。しかし羊毛価格が低迷した1880年代から1900年にかけて酪農に転身したという(Graves, 2004)。

ところで鉄道会社は路線を敷いた線路の両側、1マイル毎に10セクション、合わせて20セクションをチェックボード状に所有することができたので、中西部で巨大な大土地所有者になった(矢ヶ崎ほか, 2003)。カリフォルニア州でもサザンパシフィック鉄道会社は別格の大土地所有者であった。サザンパシフィック鉄道会社に次ぐ地主はなかでもミラーアンドラックス社(Miller and Lux)である。モーリル法(1862)の結果、同社は79,000エーカー取得し、その後メキシコ時代の世襲農場ランチョを購入するなどして、1871年には450,000エーカーを所有するまでになった。所有者のヘンリーミラー氏の亡くなった1916年にはカリフォルニア州に1,250,000エーカーの土地を所有した。そのうちの920,000エーカーがサンホワキンバレー(平原・盆地)に存在した。この会社の主要目的は牧牛であったが、年間降水量は150mm程度で、砂漠に近い環境にあったサンホワキンバレーの広大な荒蕪地の利用の一つとして乾燥に強い羊の放牧業があった。羊の放牧基地はマーセド郡のロスバノスとカーン郡のボタンウィロウ牧場(Buttonwillow Ranch)に置かれた。1880年のセンサスによるとサンホワキンバレーにはマーセド・フレズノ地区とカーン郡という二

つの羊の集中地が存在した。前者には383,716頭、後者には345,688頭の羊がいた(Graves, 2004)。同社は8~10万頭の雌羊(Ewes)を所有していたので、それぞれ15~25%が同社の所属といえよう。

1860年にカーン川溪口のリオブラボー牧場を経営していたジュウェット氏がバーモント州からメリノ種を導入し、優れた羊毛を生み出す品種に発展させた(Morgan, 1914)。ミラー氏は、バスク地方に個人的なコネを有していたので、バスク人をアメリカに移民させ、キャンプで訓練し、羊飼いにした。そしてこの牧場の最高責任者はバスク人が当たったという(Paquette, 1982)。

つぎに大きな地主はカーン郡土地会社(Kern County Land Company)である。この会社はカーン郡の湿地の開墾を契機にチェックボード状の土地を取得したことに始まる。元サザンパシフィック鉄道の社員であったCarrとTevisおよびHaggin氏が集めた土地を合わせて1890年に組織された。その後も土地の集積をはかり、1900年までに500,000エーカーの地主となった。この会社も広大な地域の土地利用として羊の放牧を行った。その本部はバイカーズフィールドの南東部のサンエミディオ牧場に置かれた。同社は1875年から1895年にかけて羊と羊毛に100万ドル投資し、1892年には7,000頭の雌羊を飼育し、子羊の最大の繁殖業者と宣伝していた。ところでカーン川のようにシエラネバダ山脈に源を持つ河川は春の雪解け水で水をあふれさせ、盆地の低地部にブエナビスタ湖などの湿地群を作り出していた。その雪解け水を活用してフライアント・カーン水路など多くの灌漑水路が造成されるとともに、カーン郡土地会社は、バイカーズフィールドの北部や南部の土地を20エーカー区画で入植者に切り売りした。その後1976年に、同社は185,000エーカーの土地をテネコ社(Tenneco)に売却し解散

した。古い地籍図 (Agri-map) をみると荒地地に Kern Land Company の土地がチェックボート状に残っているのが確認される。

もう一つの地主はテホン牧場 (El Tejon Ranch) である。ビール氏 (E. Beale) が1865年に4つのランチョ 265,000 エーカーを購入し、最大の面積を有したランチョ名を採って牧場名にしたものである。この牧場でも広大なテハチャピ山麓の土地利用として牧羊が行われ、最大10万頭の雌羊を放牧するまでになった。ここでもバスク系の羊飼いが雇用されたのである。なお、1891年には面積265,000 エーカーとなり、ビールの死後牛の生産に重点が移った。その後、牧場から石油が出たりしたため、経営は多角化してきたが、チャンドラー財閥が購入した1911年には278,000 エーカーであった。1976年、テホン土地会社は、231,000 エーカーを有し、肉牛の牧場に加え、果樹栽培と作物栽培を続けている。

2. 大回遊移牧

1864年の夏の旱魃が牧羊業者に羊を山地に避難させた結果、この毎年の山地移動が羊にも良いことがわかった (Douglass and Bilbao, 1975)。サンホワキンバレーの最南部のカーン郡では羊群を夏営地として山岳に毎年送る慣習が存在した。1865年に確立した羊の移牧の回廊は、カーン郡からモハーベ砂漠の北部を越え、シエラネバダ山脈の東麓を北上してモノ郡に至る。そこから山地を越え、西側斜面の山麓を南下してカーン郡の冬営地に戻るものである (Douglass and Bilbao, 1975)。これは大回遊移牧 (Grand Circuit) と呼ばれるもので、典型的なものは、「そのルートは、デレーノ (標高100m 筆者追加、以下略) から南東にコマンチポイント (326m) に向かい、そこからテハチャピ峠 (1,206m) を越えてモハーベ砂漠 (700~900m) に下りて放牧する。そこから

シエラネバダ山脈の南部のカーン高原に入っていく。そこで羊群はモナケ草原 (2,300~2,600m) などみずみずしい植生を食べ栄養をつける。そこから羊飼いはグレートウェスタン分水嶺を越えてカウエア川流域に入り、放牧しながらヴァイセリアへ、その南のカーン郡に戻るものである」 (Powers, 2007)。

この大回遊移牧と並んでシエラネバダ山脈の東麓を北へ進んでモノ湖周辺で山地放牧する移牧も存在した。1981年にベイカーズフィールドに来る前にロサンゼルス郡の牧羊場で羊飼いをしていたジャンアンソラベヘーレ氏は、モハーベ砂漠を越えてモノ湖に羊の移牧を行っていたという (Paquette, 1982)。

シエラネバダ山脈東部のビショップを郡都とするインニョ郡は、そこを通過する羊群の所有者に通行税を課した。「1896~97年の通行許可者は34人であった。そのうちバスク人は15人であった。彼らは、通過羊98,850頭のうち56,800頭を所有していた」という (Douglass and Bilbao, 1975)。

サンホワキンバレーでは大土地所有者の出現と広大な荒蕪地の利用として羊の放牧業が繁栄した。周知のようにサンホワキンバレーは地中海式気候の冬雨で春は緑の野辺となるが、夏は乾燥したカラカラの乾燥景観となる。バスク系羊飼いは、近くのテハチャピ山地やシエラネバダ山地が地形性降雨で故郷のピレネー山地同様、羊の放牧適地であることを知っていた。「羊牧場経営者は、砂漠と山地の両方を活用すれば、年間を通じて豊かな飼料が存在することに気づいた。そして彼らはテハチャピ山地からゆっくりと羊群を連れてモハーベ砂漠に降り、シエラネバダを越えて故郷にもどるルートを完成させた (図1)。この10カ月を要する600マイルに上る羊のルートは大回遊移牧 (Grand Circuit) と呼ばれ」 (Powers, 2007)、主なものが二つあった。

一つはテハチャピルートで、もう一つの道は、デレーノから東に進みグラニットステーションで羊

は長距離の旅に備えて重い冬着を刈り取られる¹⁾。「ここを基点としてホットスプリングバレーを

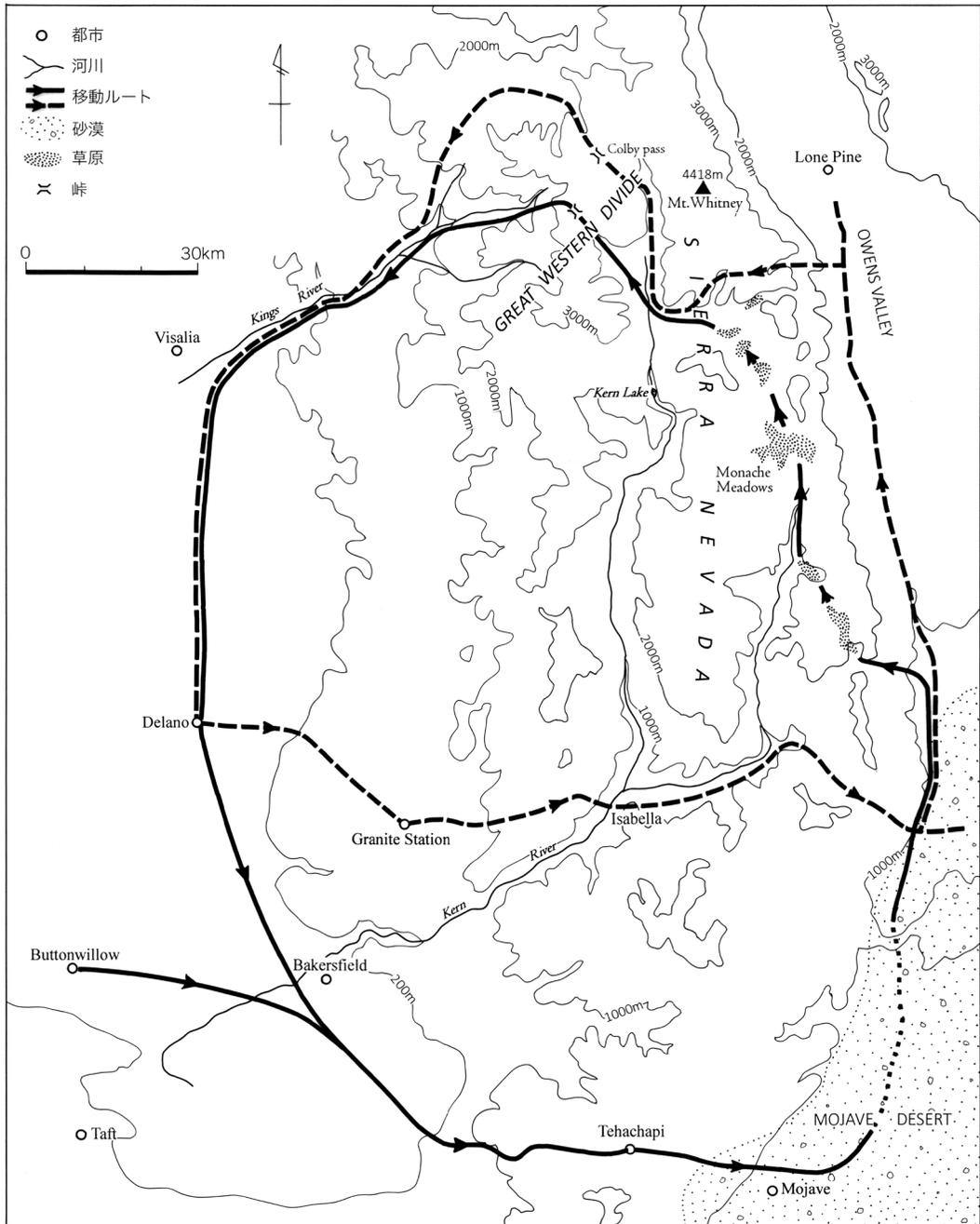


図1 大回遊移牧路-シエラネバダを超える移牧路

(Powers (2007) により作成)

通って東に進み、羊飼いは、ポツソフラット（800～1,200m）とグリーンホーン旧道を通って羊を追っていく。イザベラ（800m）でカーン川を渡り、南フォーク谷を通り、ウォーカー峠（1,647m）を越えてモハーベ砂漠に下りて行く。砂漠での餌は良好だと考えられており、その後羊群は北へ向かってローンパイン辺りまで行く。その前に西に曲がってコットンウッド峠（2,400m）を越えてカーン高原の北に着く。そこでいくつかの草原で草を食べ、カーン川を遡り、グレートウェスタン分水嶺を越えてほぼ同じルートをとる」というものである（Powers, 2007）。このことは羊飼いが環境の異なるさまざまな生態系を結びつけて牧羊していたことがわかる。

羊飼いがデレーノに集中したのは、1873年サザンパシフィック鉄道がカーン郡にまで延び、デレーノの町を造ったからである。「その町は約12年間、畜産センターとなった。多くの羊飼いが羊毛を刈り、それをサンフランシスコに移出するため、羊群を連れて集まった。・・・しかし、町の経済は季節的なもので、年中行事の毛刈りが終わると、羊群は山地牧場に追い立てられ、町は静かな取引地に戻った」という（Boyd, 1997）。つまり、大平原のカウタウンのように、一つのブームタウンだったのである（矢ヶ崎ほか, 2003）。

このルートにはいくつかのバイパスも存在した。例えば、ヒューロンで32,000頭の羊を飼育していた、アズレス諸島出身のルイス氏はポータービルの東のヨコールバレーを通り、リトルカーン高原を通ってカーン湖に着き、カーン川を遡ってコルビー峠を越えてシュガーローフやシダークロブ周辺の草地を遊牧し、カウエー川流域に入るものであった（Brown, 1969）。

3. 羊の管理とバスク人

羊毛が刈り取られ都市へ運ばれると羊飼いは山

地へ向かう。2人の羊飼いで2,000～2,500頭の羊群を世話した。彼らの最も重要な助人は牧羊犬であり、コリー種やシェパードおよびその雑種が使われた。羊飼いは放牧地の餌が豊かであれば、羊の群れをゆっくりと移動させ、そうでなければ動きを早める。

高原草地への羊の放牧はいつから行われて来たかは不明であるが1850年以前の早魃時に伝導所の羊が高地に放牧された記録があり、1870年にカーン川下流の牛飼いが上流の高原草地を夏の放牧地に使用しようとした時には、既に羊飼いの宿営地があったという。多数の羊群を高地の青々とした草原に連れて行くことは、倒木を片付け、突き出た岩を廻り、流れの速い河川を渡り、森林限界の上の尖った岩々を越えて行かねばならない過酷な仕事である。その上、山地ライオン、コヨーテばかりでなく、黒熊、灰色熊も生息している。これらの害獣への対処と先住民への対処が課題であった。大回遊移牧の移動距離は600マイル以上で、羊飼いは天候の変化や羊を襲う野獣に対処する知識、山を登り下り谷を渡る頑強な身体と孤独な遊牧生活に耐える精神を必要とされた（Powers, 2007）。

羊飼いの必要物はごく少ない。彼らの全ての持ち物はロバの背中に乗せられ、羊とともにある。キャンプ地点で必需品を入手できるが、多くは2人のものである。夜、ロバから寝袋や調理器具を下ろす。彼らは悪天候に備えテントを持っているが、星空の下で野宿して過ごすことが多い。調理器具は鉄の鍋、やかん、オープンなどである。食料は単純でマトンとラム、少しの玉葱とジャガイモ、サラドールパン、羊乳から造ったチーズ、たっぷりのバスクワインである（Powers, 2007）。

羊飼いはヨーロッパ各地から渡米したが、カーン郡に定着したのはピレネー山地出身のバスク人

が最も多かった。初期のバスク人たちはピレネー山地の自然のなかで羊と一緒に暮らしてきた。その経験が、家族や文明から離れて何か月も羊を追う強靱な肉体と精神を形成した²⁾。そして羊の所有者は何千頭の羊の飼育を任せる信頼できる羊飼いを求めているのである。

初期の羊飼いのなかで影響力のあったのはドミンゴオイハルザバルである。ピレネー山麓のフランスのハスパレン生まれのドミンゴは10代の半ばに故郷を離れ、チリでの仕事を經由して1867年カリフォルニアに着いた。サンフランシスコでミラーアンドラックス社に雇われ、経験を積み資金を貯めた (Paquette, 1982)。兄弟2人とカーン郡で羊産業に参入し、成功した。甥のドミンゴオイハルザバルもミラーアンドラックス社のボタンウィロウ牧場の責任者になった。

若いバスク系羊飼いのなかで1872年にスペインからカーン郡に来たのは、ファウスチーノノリエガ (Faustino Noriega) である。彼はホーン岬周りの3カ月の航海でサンフランシスコに着き、鉄道で終着駅のデレーノに着いた。彼は英語が話せず支援者もいなかったが、仕事の流儀は知っていた。彼は1879年カーン郡土地会社の羊飼いに成り、牧場長になった。1982年にミラーアンドラックス社に移り、ボタンウィロウ牧場の責任者になった (Wentworth, 1948)。そして多くのバスク人羊飼いを雇った (Douglass and Bilbao, 1975)。このように故郷を離れたバスク人は大牧場の責任者となり、独立して羊の所有者、つまり牧羊業者になったのである。独立するに当たって羊飼いは賃金を雌羊でもらい、雇い主の羊と一緒に放牧し、1,000頭に達したとき独立するものが多かったという (Douglass, 1977)。

ノリエガ氏はスペイン国境に近いフランスのアルルーデス出身のフェルナンドエチェベリー氏と共同で1893年にイベリアホテル (数年後ノリエ

ガホテルに改名) を建てた。ここがバスクの人びとを連鎖移民させ、羊飼いやなどの仕事を斡旋し、バスクの人びとが集う社会活動の拠点になった (Paquette, 1982)。

III 放牧地の制限と長距離移牧

1. 過放牧と国立公園の設置

大回遊路とその周辺では、羊飼いは森林限界の上の草地を求めて羊群をグレートウェスタン分水嶺にある標高3,000mのkolビー峠を越えて移動させた。1889年の夏、ベイカーズフィールドから8人の登山家がホイットニー山 (4,418m) への登頂を目指した。登山者は、シエラネバダ山脈を移動するにつれ、高原草地の草が枯渇しつつあることを目撃し、羊群の過放牧が数え切れないほどの被害を与えていると罵っている。「羊の数え切れない足跡によってどの藪も木も破壊され、根から引き抜いて食べるので大地の中まで荒らした。羊の細長く走っているルートは、暴風雨の水を集めて山際に深い溝を刻んだ。その上、羊飼いは意図的か不注意にかかわらずあらゆる方向に野火をした。意図的に灌木や密林を焼くことは、次の年に餌が増えることを狙ったものであり、不注意というのは野生動物を近づけないように木の下に火を入れたのである。羊の放牧移動は山地森林を破壊するおそれがある。これによって雪から守り、湿地を潤してきた自然の大地に打撃を与え、笑顔のカリフォルニアの平原をつまらない褐色の砂漠の地に変えてしまうだろう。このことは絶対防がなくてはならない」 (Boyd, 1973)。

この記録は、羊が生態学的環境悪化を与えているという最も早い記録の一つとなっていた。高原放牧地の植生変化は、花粉分析の結果にも現れている。すなわち、Dull (1999) によると、モナケ草原 (ブラウンメドウ) では放牧前は支配的な植生であったウキゴケ類 (*Riccia*) やヤナギ類

(*Salix*) が1900年までに減少し、ヨモギ類やカヤツリグサ類が増加したという。

1890年にセコイア国立公園 Sequoia National Park がアメリカ3番目の国立公園として創設された。同じ年にヨセミテ国立公園と両者の間にあるキングスキャニオン国立公園も設置された。これらの国立公園内では巨木の伐採、鉍石の採掘ばかりでなく、家畜の放牧が禁止された。この国立公園は、シエラネバダ山脈のセコイア国有林、インニョ国有林の標高の高い部分に設けられたので、グレートウェスタン分水嶺やカーン川上流部が含まれる。このことが大回遊移牧を不可能にし、羊飼いが利用できる放牧地の面積を大幅に減少させる結果となった。何人かの羊飼いは、放牧地を守ろうと闘ったが、国立公園の集中的監視を通じて高地における羊の数は毎年減少し、見られなくなった。このように国立公園の設置はシエラネバダ山脈を越える「大回遊移牧」を困難にし、大規模牧羊業者の解体を促したといえよう。

2. 山地放牧の規制と長距離移牧

国立公園の設置によって大回遊移牧路は困難になったが、それ以前から家畜の放牧には規制が存在した。1874年のNo Fence Law は家畜の所有者に牧柵設置を義務づけたので、牧柵代が土地代より高くなることがあったこともあり、牧羊業者は減少した。最後の羊群が平地へ下った時、羊飼いが山地に火入れする慣習があるという理由で、「1898年に羊が山地から閉め出された時、多くの大規模経営者は羊産業から撤退した」という(Falcorner, 1963)。

この牧羊業者にさらなる打撃を与えたのが1934年に成立した「テイラー放牧法 Taylor Grazing Act」である。この法律は国有の森林や放牧地の保全とその利用改善を目指すもので、公有地での羊や牛の放牧を規制するようになった。国立

公園での家畜の放牧は禁止されるようになったばかりか、国有林などの公有地での家畜群の放牧には内務省の許可が必要になった。公有地の放牧には「放牧許可書 (permits)」を土地管理局に申請し、認可される必要があった。これらの「認可書」には放牧面積と放牧頭数、エーカー当たりの賃料が決められていた。この法によって権利書のある土地から2マイル以上離れて放牧すること、地方の土地持ち畜産家の要望を入れて羊の消毒を課すことなどにより、牧羊業者は減少した。

例えばカーン郡土地会社は、何年にもわたり合衆国最大の肉と羊毛の供給者の一つであったが、1930年代に彼らは羊の利権全てをM&R社に売却した。M&R社はオスカー・ルドニックとグレゴリオ・メンディブルによって設立された牧羊会社である。なお、カーン郡土地会社は土地とその他の権益、全てを1976年にテネコ (Tenneco) 社に売却した。

さらに、テホン牧場も羊部門を多角経営から切り離れた。それを受け継いだのがジョンピッドルト氏で、同氏はエルテホン牧羊社を設立した。このように大土地所有者は、人手のかかる羊の放牧に関心を示さなくなり、粗放的な牧牛や集約的な農耕および石油産業等にも目を向けるようになった。結果的にサンホワキンバレーでは羊産業における大牧場の役割は縮小し、比較的小さな個人経営者が牧羊業を行うようになった。牧羊業を続ける者は自前の牧場と家族を有すると同時に高原のバレーや森林で放牧地を探さなければならなくなった。そこがオーエンズバレーやネバタ州の種々のバレーであった。

ここで往時の羊の長距離移牧の状況をみよう。1966年『バスク人とカリフォルニアの羊にとって400マイルの行軍は年中行事』の名のもと次のような新聞記事が載っている。「バスクの羊飼いによって追われてきた羊群が、今週アメリカで最

も長い移動路の終わりに近づきつつある。羊飼いは30～40日かけて、長さ300～400マイル、幅半マイルの道を羊群とともに歩き続けてきた。その道は100年以上続くカリフォルニアの伝統的な羊道で、カーン郡の西側からカリフォルニア州とネバダ州の境のモノ湖の北の、ゴースタウンボーディまで続いていた（図2）。シエラネバダとホワイトマウンテンの間にあるオーエンズバレーの、標高1,600m余の夏の牧場には今年75,000頭の羊が放牧される。3,000頭の羊の所有者であるバスク系のノリエガ（Frank Noriega）氏によると、高原の牧場に放牧するのは良質の羊毛を採るためだという。高原では雌羊は早く懐妊し、双子を生む率も高くなるからである。北へ羊を移動させる前に、ベイカーズフィールドの刈跡放牧地で毛刈りを行い、身体を軽くする。バスク人の羊飼いは、マッキトリックやタフト、ベイカーズフィールドからテハチャピ峠を越え、モハーベ砂漠に羊群とともに1日8～10マイル進む。モハーベ砂漠から北への道は、1人の羊飼いが1,200～1,800頭の羊群と2頭のロバと3頭の誘導山羊と1頭の牧羊犬を連れて歩く。伝統的羊道は土地管理局によって指定されており、国道14と395号、さらにロサンゼルス水路に沿って北上し、クローレイ湖、モノ湖とボーディに囲まれた牧場や森林（夏营地）に至る」（Los Angeles Times（以下LATと略）、June 22, 1966）。

「ノリエガ氏はその名のついた畜産会社を営し、半分を高原の牧場に送り、残りをタフト近くの大麦畑やビート畑に刈跡放牧する。ベイカーズフィールドの判事でもあるノリエガ氏は若い頃、父と一緒に羊群を連れて400マイルを歩いた。この歴史的な道を歩かせるのに牧羊業者は、羊1頭当たり10セントを政府に支払わなければならない。牧羊業者は1日5マイル歩かせることに同意し、専用権が与えられる。羊は歩きながら食餌す

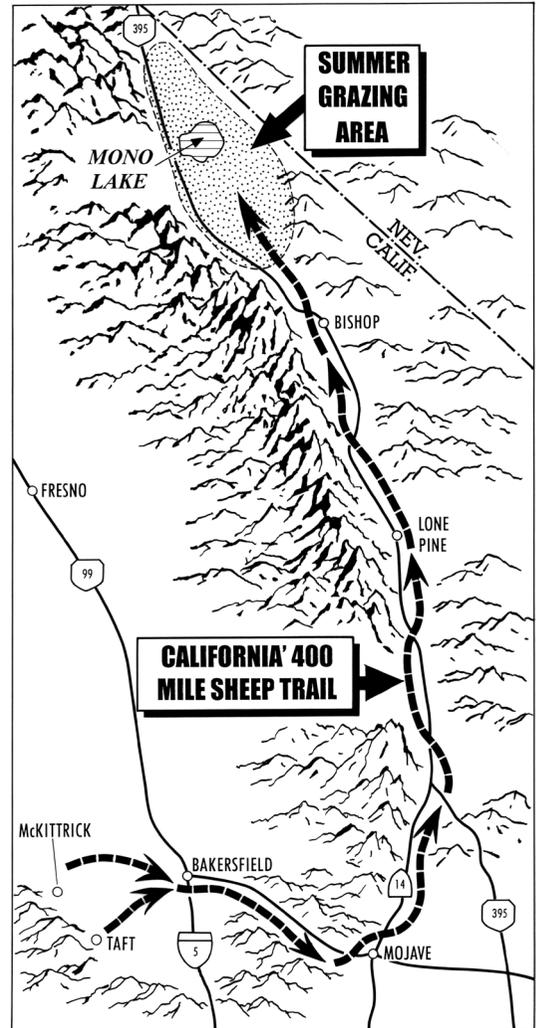


図2 カリフォルニア羊の伝統的長距離移牧路
（Los Angeles Times（June, 22, 1966）による）

る。砂漠では雑草、ブッシュなどであるが、標高が高くなると牧草となる。ノリエガ判事によるとトラックで輸送しないのは節約のためであり、それが見合わなければ止めてしまうだろう。3,000頭の羊を400マイル運ぶとタフトからクローレイ湖までトラック輸送するより1万ドルの節約になるという。しかし、帰りは11月15日にトラックで輸送する。というのは妊娠している雌羊は重すぎるし、餌もなくなるからである。羊飼いは10

日ごとに靴を履き替えるほど厳しい労働である。ノリエガ氏の2つの群れは、1,800ガロンの給水車で、毎晩羊に水が供給される。別のトラックは足を痛めた羊や、弱った羊を次のキャンプ地まで20～30マイル運ぶのに使われる」(LAT, June 22, 1966)。

「毎年300～400のバスク人羊飼いが、スペインとフランス国境の険しい山地から西部の放羊地域にやってくる。彼らは羊群を世話するため3年契約(月230ドルと生活必需品)を結ぶ。バスク人羊飼いは賃金6,500～7,000ドルを持って故郷に帰る。彼らがもう3年、つまり羊と6年間働くと、ピレネー山地の故郷に18,000～20,000ドル持ち帰ることができる。彼らはその資金で余生を快適に送れるだけの小さな牧場と家畜を買って一人前の男になるのである。山地放牧が終わると出産シーズンである。雌羊が秋にカーン郡に戻ると子羊が生まれる。羊は若いラムが3月に市場に出されるまで一緒に放牧される。多くの羊は7回の旅をし、そして市場に出される」(LAT, June 22, 1966)。ここにはノリエガ氏の子供の頃と歩いて羊道を移動した1960年代の最後の姿が描写されている。

3. 伝統的長距離移牧の担い手

移民の先駆けであるファウスチーノノリエガ氏の長男弁護士であるフランクはノリエガ牧羊社(Noriega Sheep Co.)を引き継ぎ、現場責任者のマリルーチ氏と共同で経営した。会社は6,000頭の羊を所有し、前述のように半分を長距離移牧させ、残りを刈跡放牧させていた。次男のアルバートもいくつもの事業の一つとして羊産業を行っている。妹のマルセリーナも羊飼いと結婚した(Independent Farmer & Stockman, May 15, 1960)。以下、ノリエガ牧羊社と同様、1960年代まで羊の長距離移牧を実施していた牧羊社を挙げてみよう。

1) エチェベリー牧羊社

(Etcheverry Sheep Co.)

1892年ノリエガとイベリアホテルを建設したフェルナンドエチェベリーは、1902年に同郷(ピレネー山地フランス側の山村アルルーデス)のマチルダエチェベリー氏と結婚した。同じ姓でもフェルナンドの屋号とマチルダの屋号は異なり別の一族に属していた。彼女の兄弟姉妹は、次々に渡米し、羊産業に関わった。マチルダの兄のパチンとミシェルも羊産業に、妹もエチェニーク、ボルダと結婚し、羊産業に従事した。

フェルナンドの従兄のパチンエチェベリーは結婚後間もなく妻を亡くしたので、1913年に故郷の隣家であったマリアンヌサロイベリーと再婚した。牧羊業は発展していたが、1932年突然亡くなった。息子のフィルバートは父の死を機に、15歳で家業の牧羊を継がざるを得なかった(Paquette, 1982)。彼は遠いネバダ州に羊を放牧する長距離移牧の草分けとなった。彼の家族は夏にネバダ州で過ごし、冬と開学期はベイカーズフィールドで過ごした。彼は30年間クライスラー(ニューヨーカー)で9時間かけて、ネバダ州北部のエルコの町に通った。夏には最高時で20,000頭の羊をネバダ州北部の放牧地まで歩いて移動させた。エルコの町への移動は1955年から鉄道に変わったものの、長距離移牧を続けてきた(Bakersfield Californian(以下BCと略), Oct 12, 2000)。

フィルバートの末弟マイケルも第二次大戦の兵役後、1945年にフィルバートとルドニックのやっていた羊産業に参画した。そして、ERE牧羊社を起こし、ネバダ州のユウリカ郡に放牧地を所有し長距離移牧を行っていた(BC, Sep. 1, 2011)。

2) テホン牧羊社(El Tejon Sheep Co.)

ピレネー山地のフランス側最奥地の村ウプレル生まれのジャンビッドルト(Jean Bidart)氏

は、1888年21歳でカリフォルニアに渡来し、カーン郡の傑出した羊飼いになった。1901年ノリエガと結婚したルイズの末の妹、マリアンヌインガと結婚し、セブンススタンダード道路に農場を求めた。1900年代に羊の飼育に力を入れ、テホン牧場から羊を引き受け、テホン牧羊社を立ち上げ、カーン郡西部のマッキトリックに放牧地を購入し繁栄した。しかし、1918年のスペイン風邪で突然命を落とした。長男のレオナードは高校を辞め、羊産業を引き継いだ。1922年にはシエラネバダ山脈の東部のモノ湖近くを夏営地とする羊の長距離移牧を開始していた。レオナードはカーン郡、サンベニト郡、マーセド郡の土地を購入し、1930年代には農業へ進出した。これらがビッドルト兄弟農興社をカーン郡の有力農企業となる基礎を形成した (Paquette, 1982)。このようにレオナードのテホン牧羊社は前述のノリエガ牧羊社と同様、マッキトリックの西の牧場から羊群をモノ湖周辺に連れていく長距離移牧を続けてきたのである。

3) アンソラベヘーレ牧羊社

(Ansolabehere Sheep Co.)

フランスのサンエチェヌデバイゴリー出身のジャンアンソラベヘーレは1881年19歳で渡来し、ロサンゼルス郡で羊飼いとして働いた。彼は羊飼いとして働いていた牧場主の妹マリーと1904年に結婚し、ベイカーズフィールド北西部のオリーブ通りに居を構え牧羊業を続けた。このようにバスク系羊飼いは牧羊業者同士の結婚を通じ、強い絆で結ばれることになったのである (Paquette, 1982)。

この一族の1人ベンアンソラベヘーレは19歳で渡来し羊飼いとして働いた。そして1980年当時、前述のノリエガ氏と共同してアンソラベヘーレ牧羊社を経営し、牧場の本拠をベイカーズフィールドの南東部に置いた。彼は雌羊5,000頭と子羊・

雄羊合わせ12,000頭を飼育していた。子羊は110ポンドに太らせ、市場に出荷した。「毎年羊群は、ビショップの北でオーエンズバレーを横切りホワイトマウンティンの山麓から放牧され次第に上って行く。秋になると片道300マイル、子供を孕んだ雌羊はビショップを經由してアーヴィン、ラモントにトラックで運ばれる。そこには栄養に富んだアルファルファ、ぶどうの葉、穀物、豆、玉葱の収穫跡地の飼料が存在する」からである (Farm News, Nov 20, 1981)。

4) メンディブル牧羊社

(Mendiburu Sheep Co.)

フランス国境に近いスペインのエリゾンド出身のグレゴリオ・メンディブル氏は、1908年渡来し羊飼いとして働いた。5年後独立して羊産業に参入した。1916年、メンディブルは、牧羊業をしていたT. エチェニークのハウスキーパー、ユリバーレンと結婚し、ベイカーズフィールド北西のノリス地区に農場を購入し拠点とした。

前述のように彼の羊産業はM&R Ranchであった。その本部はモハーベ砂漠の西側、カンティルに置かれた。彼はサンフランシスコのハバー羊毛会社の買い受け人もしていたので、財を築き土地も購入した。1931年カーン郡羊毛生産者組合を立ち上げ、組合長になった。

1952年フランクイツリリア氏が働き始めた時、メンディブル牧羊社は25,000頭の羊を放牧していた。この牧場は1970年代に最大25,000~40,000頭の羊を飼育するまで発展した。息子のジョウはカリフォルニア羊毛生産組合連合会の会長と全米会長をも務めた。フランクイツリリアとメンディブルの共同経営のI&M牧羊社も、モノ湖北部まで羊の長距離移牧を実施していた。ジョウは、イツリリア兄弟のロレンツォとインニョ牧羊社 (Inyo Sheep Company) も設立していた (BC, Mar 22, 1981)。

以上のことから羊飼いとして渡米したバスク人は5～6年後、共同経営という形で独立して牧羊社を開始した。しかも、バスク人同士の婚姻関係を通じて、強い縁戚関係、社会的結合を保持してきたことがうかがえる。

IV カーン郡における長距離移牧の現在

1. 羊数の推移と規模別飼育数

1960年は統計的に羊数と子羊数が統合されて表示されるようになった年でもある。図3は1960年以降のカーン郡における羊数の推移を示したものである。それによると1960年には165,414頭の羊となっている。この頭数は「1951年には170,000頭の雌羊、158,362頭のラム」と表現されているので、雌羊数を表すものといえよう。ちなみに羊毛は、1959年「159万ポンド生産され、1ポンド0.35ドル」とラムの値段1ポンド0.20ドルより高かった（LAT, Apr 12, 1959）。事実、羊毛の価格が良かったのは「1頭の羊から10ポンドの毛、1頭当たり7～8ドルになる。また、羊の

所有者は羊の毛刈り賃1頭当たり1.25ドル。アルファルファ畑への放牧料1エーカー当たり10～12ドル」と毛刈りクルーの紹介記事（LAT, Mar 7, 1977）からも判断される。

カーン郡の羊数は1970年189,000頭、1977年175,000頭と比較的安定していた。事実、「カーン郡はカリフォルニア第1の羊郡である。10月から2月まで約18万頭の羊がアルファルファ畑に放牧される。2月半ばから羊は餌を求めて山麓や砂漠や州外に行き、いなくなる」（BC, Jan 13, 1980）と描写されている。

しかし、1990年代に入ると羊数は12～13万頭台に急減する。「毎年の春、サンホワキン平原の草が枯れ始める時、放牧業者は各自の雌羊と子羊をモハーベ砂漠に移動させる。連邦土地管理局の所有する砂漠のうち100万エーカー以上が放牧業者に貸し出されてきた。子羊はそこで体重を増やして5月はじめに市場に送られてきた。放牧業者は10万頭を砂漠に放牧する準備を進めてきたが、放牧頭数の制限を求める環境保護論者の反対

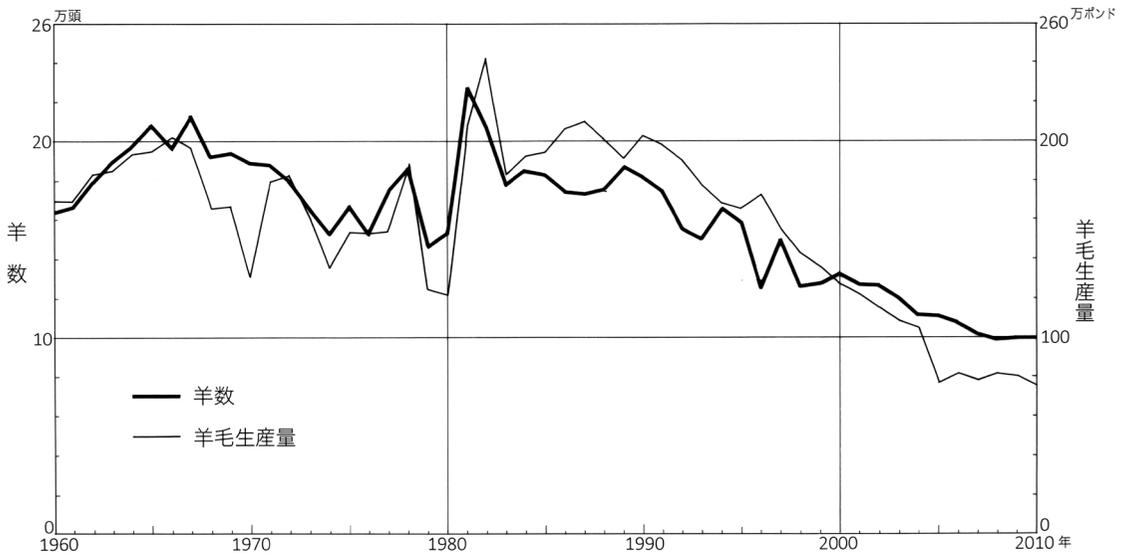


図3 カーン郡における羊数の推移

(Department of Agriculture, Kern County Agricultural Crop Report (1960～2010) による)

に直面している。放牧業者は、羊が砂漠亀に脅威を与えているという環境論者の意見聴取した判事の裁定を受け入れ、従来放牧してきた面積の半分は7万頭の羊を放牧することで合意した」(BC, Mar. 24, 1993)とし、1995年には『羊毛生産者は窓際に追いやられた』というタイトルの下に、「生物学者は羊が絶滅危惧種の植物や動物、特にモハーベ砂漠でみられる砂漠亀に脅威を与えている」という論評を加えている。

2000年にはカーン郡の羊数は131,000頭、2010年には10万頭になった。事実、2008年かつて30万頭の羊がいたが、今や7万頭であるとカーン郡羊毛生産者協会のムノツ氏は述べている(BC, July 24, 2008)。

羊数の減少は、放牧業者数の減少にもなる。表1は、アメリカ農務省の農業センサスにより羊の肥育規模別業者数を示したものである。それによると100頭以下、就中24頭以下の業者はホビー農家といえよう。つまり、放牧業を生業とするものは1,000頭以上と見ることができる。それによると1,000頭以上の経営体でも1982年の26から2007年の21へと減少している。1974年、「1,200～20,000頭を飼育する経営体は30社」としているが、「カーン郡羊毛生産者協会の会員は1981年には45～50人いたが、現在20だ」と会長のドミニクミナベリガリは述べている(BC, July 24, 2008)。

この羊数や牧羊業者の減少は「1990年代にはオーストラリア産の羊毛やラムの流入によって国際市場の羊肉、羊毛価格が低迷して牧羊業者は悩まされてきたが、モハーベ砂漠の放牧地の割り当ての減少がこの産業に最も大きな影響を与えた」と考えられている(BC, Jan 11, 1995)。

これらの減少は、羊飼いにしても変化を与えている。羊飼いの移民割り当ては1952年、250から500人に増員された結果、スペインとフランスのバスク地方から毎年500人の羊飼いがアメリカ西部にやってきた。これはバスク人がアメリカ西部の羊飼いとして最高の評価を受けていたからである³⁾。しかし「バスク地方の経済発展とともにアメリカへの移民は減少し、1970年代止まってしまった。羊の所有者は南米との接触を始め、ペルー(1971年)やメキシコ(1973年)からの羊飼いを導入した。彼らはかつてのバスク人のように外国人労働者として3年間滞在し、故郷に戻る」。カーン郡羊毛生産者組合長のフランクイツリリア(パーコ)は「20年前カーン郡の羊飼いの95%はバスク人であったが、現在では10%以下になった。しかも数十年間羊飼いに従事してきた高齢者だ」(LAT, Aug 26, 1989)と述べている。そして、1990年には「羊を世話するのはペルー人」として3年契約で渡米した羊飼いを紹介している。「リカルドフローレスは、ペルーでは羊飼いでなかったが、兄の勧めで貧しさから逃

表1 カーン郡における羊数の規模別推移

規模別	2007	2002	1997	1992	1987	1982
1-24	67	65	48	60	57	85
25-99	13	13	12	16	24	23
100-299	-	-	1	2	4	2
300-999	1	-	2	4	4	3
1,000頭以上	21	15	20	21	29	26
計	102	93	83	103	118	139
頭数計	106,940	121,593	149,127	170,874	174,896	181,866

(USDA: Census of Agriculture より作成)

れるため故郷のハンカイヨーを離れて渡米した。合衆国で3年間羊を世話するという契約で、彼はすぐに仕事を覚えようとしている。アメリカの水準からすれば、1週間7日間、24時間の仕事では賃金は低いが、フローレスにとって賃金は良いという」(BC, Jan 17, 1990)。

2. 現在の牧羊業者とその類型

現在、ベイカーズフィールド周辺のカーン郡で羊の放牧を行っていると確認できたものを挙げたのが、表2である。それによると羊の主要放牧地はa) 盆地床のアルファルフア畑, b) サンホワキンバレー周辺丘陵地の自然草地, c) モハーベ

表2 カーン郡の規模別羊所有者と移牧形態

Sheep Company Name of Owner	Size of Ewes (Employers)	Grazing area				Market of Lambs
		Alfalfa	Range	Desert	Mountain	
① A & F Sheep Company Freddy Iturriria	8,000 (11)	●	●	●	● ¹⁾	Feedlot
② Diamond Sheep Co. Minaberri, Sebastian	7,000 (10)	●	●	●	●	Feedlot
③ I & M Sheep Company (Paco) Iturriria	6,000 (9)	●	●	●	●	Feedlot
④ Ben Ansolabehere Ben Ansolabene	4,500 (8)	●	●	●	●	
⑤ Hay Bros Sheep Company Dick Hay & Daniel Hay	4,500 (8)	●	●	●	●	Buyer (F)
⑥ Eureka Livestock Co. Nick F. Etcheberry	4,250 (7)	●	●	△	●	Feedlot
⑦ El Tejon Sheep Company Melchor Graginerea	4,000 (5)	●	●	●	●	Feedlot
⑧ Joe F. Echenique Joe F. Echenique	2,500 (3)	●	●	●	●	Buyer
⑨ Jose M. Maritorenca Inc. Marie Maritorenca	4,500 (6)	●	●	●		Texas (F)
⑩ Juan Goynetche Juan Goynetche	3,000 (4)	●	●	●		Buyer
⑪ Jose Mari Mendibulu Jose Mari Mendibulu	2,000 (2)	●	●	▲		Buyer
⑫ (Zalba & Azparren Sheep) Pedro Zalba ⇒ Paco=Frank	5,000	●	●			
⑬ Etchamendy Sheep Co. Mattin Etchamendy	4,000 (5)	●	●			Buyer
⑭ Joe S Esnoz Joe S Esnoz Farms	4,000 (7)	●	●			Buyer
⑮ Phillip Esnoz Phillip Esnoz	3,000 (3)	●	●			Buyer
⑯ Eyherabide Sheep Co. Ray Eyherabide	1,500 (2)	●	●			Buyer

1) 近隣の山地を含む △ モハーベ砂漠は3年に1度 ▲ Cuyama Valley

(聞き取りにより作成)

砂漠、d) 国有林等の高原山地のという四つに区分される。これはほぼ季節に対応しているので四季放牧ということができる。しかも、一般に山地放牧を行う場所がベイカーズフィールドから400マイル以上離れているので、長距離移牧業者ということができる。アルファルファ畑と丘陵地の自然草地への放牧は、全員が行っている。山地放牧期間の終了までモハーベ砂漠での放牧を続行するのは、モハーベ砂漠移牧業者とする。最後にモハーベ砂漠への放牧も行わないで、サンホワキンバレーで放牧するものを、定住放牧者とする。バレー内でも羊群はアルファルファ畑、丘陵の自然草地、盆地内の低湿地と循環移動を行っているからである。

1) 長距離移牧業者

(1) I&M 牧羊社 (I&M Sheep Co.)

1952年イツリリア兄弟がスペインのエリゾンドから渡米して働いたのはM&R 牧場である。当時その牧場は25,000頭の羊を飼育していた。6年後の1958年フランクとミゲルの兄弟は、彼らのボスであったジョウメンディブルと I&M 牧羊社を始めた。その際、3,200頭の繁殖羊とロストヒルズ、ウォスコ、モハーベ砂漠に借地や公有地借地権も得た。同社はジラウド牧羊社、サニ牧羊社等を買収し、1960年代に一時18,000頭の繁殖羊を飼育するまでになった。I&M 牧羊社はウォスコを中心に、ロストヒルズ等の自然草地、モハーベ砂漠のバストウ、リッジレスト、シエラネバダ東麓のブリッジポート、リーヴァイニング、ビショップに放牧地を確保していた。共同経営は25年間続いたが、イツリリア兄弟は1983年にメンディブル氏の持ち分を購入し、共同経営を解消した(BC, Mar 24, 1993)。2008年には50周年を達成した。

I&M 牧羊社現在11月から2月中旬、ウォスコを中心とするアルファルファ畑放牧(標高70～

100m)、2月中旬から3月末までロストヒルズ、エルクヒルズの自然草地(120～500m)、4月初旬から5月末まではモハーベ砂漠のカリフォルニア市周辺(700～850m)、6から10月シエラネバダ東麓のブリッジポート西部(2,200～2,900m)など4カ所の放牧地を確保して、羊を放牧している⁴⁾。ベイカーズフィールドからモノ湖の北のブリッジポートまではシエラネバダを迂回して片道400マイルあり、前述のノリエガ牧羊社と同様、典型的な長距離移牧を実施しているといえよう。その移牧の季節的標高の状況を示したのが図4a)である。山地の放牧については後述のように私的なメドウ草地も借りている。なお息子のフランキーはカルボリ大学を卒業してカーン郡にあるニンジン加工会社グリムウェイファームズに就職しているものの、週末には羊の放牧を手伝っている。

1998年I&M 牧羊社の兄弟経営者であったミゲルイツリリアが亡くなった。兄弟のフェルナンドイツリリアは、ミゲルの後を継いでA&F牧羊社(A&F Sheep Co.)を立ち上げた。現在8,000頭の繁殖羊を放牧するカーン郡最大の放牧業者である。今ではフェルナンドの息子のエディも技術系会社に就職しているものの、暇を見て父親の牧羊社を助けている。8,000頭の雌羊に子供が生まれると17,000頭にもなるという⁵⁾。ウォスコ周辺のアルファルファ畑放牧の後、東部丘陵(220～420m)に羊を放牧する。毎年放牧しているこの地区の借地にはルドニック、メンディブル、エチエニクなどかつての牧羊業者の所有地が含まれている。3～5月にモハーベ砂漠(800～1,100m)に放牧した後、6～10月はテハチャピ山地(1,500～2,000m)に放牧するという。農場から50マイル以内という長距離移牧ではないが、これも移牧といえよう。

このイツリリア兄弟の二つの牧羊社の本部は、

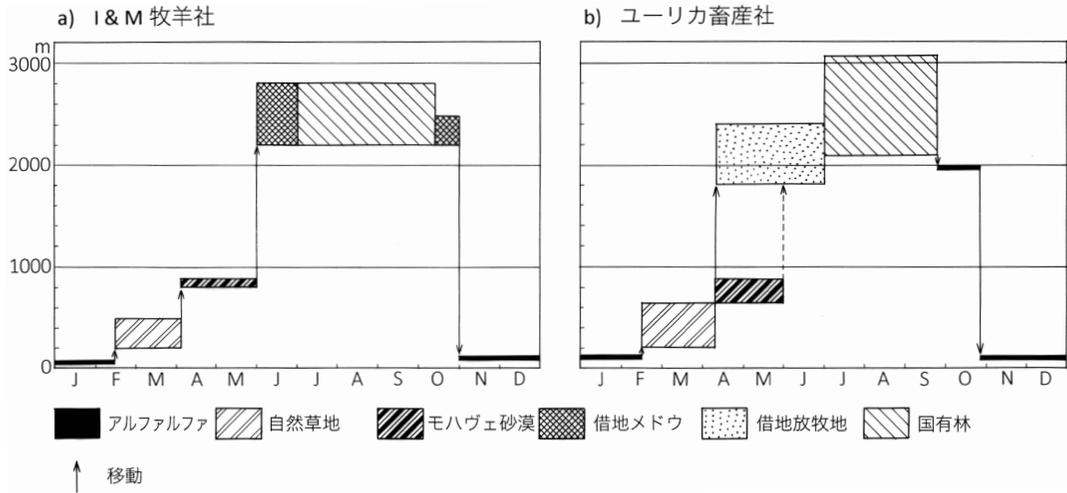


図4 放牧地の季節的垂直的变化

(聞き取りにより作成)

ウォスコの西部、マグノリア通りを北上したアーモンド畑の中にある。160エーカー所有地のうち、10エーカーの敷地は、事務所、物置小屋、ケガした羊を入れておくコラル、輸送トラックの格納庫などからなる。ここの空き地には使い古したタンク車、羊飼いの寝泊まりするキャンピングカー、金網等々が無数に置いてある。ここは年若い1人のバスク人が管理している。このようなセットは、他の牧羊社でもほぼ同じであった。

(2) ダイヤモンド牧羊社

(Diamond Sheep Co.)

セバスチャンミナベリ（正式にはミナベリガリ）氏はフランスのバスク地方を離れ、渡米した。モハーベ砂漠で羊とロバと犬と働き始めたのは1952年のことであった。1966年に独立してダイヤモンド牧羊社を設立した。

ダイヤモンド牧羊社の移牧先はアイダホ州東部のカリブーレンジ（山地）およびロサンゼルス郡の国有林である。前者はアイダホ州南東部のカリブー・タルジー国有林のうちのウェブスター山地にある。ミナベリ氏の放牧許可地は2,800エー

カーから5,250エーカーの5区域で、放牧期間は1区画6月25日から9月15日の80日、他は7月1日から8月30日の2カ月間である。ベイカーズフィールドからアイダホ州のソーダスプリングスへの距離は高速道路のソルトレイク回りで775マイル、放牧地までは片道800マイルに達する。これはアメリカ最長の長距離移牧路であろう。この国有林への放牧はほぼ20年前から続けているという⁶⁾。

国有林への羊の放牧が山火事の災害を減ずる役割があるという雑誌記事のなかで、「2,400頭の羊がエンジェルス国有林10,000エーカーに5月から8月まで放牧されており、防火目的のために森林局は放牧料を免除している。ミナベリ氏はその放牧を17年間続けている」とロサンゼルス郡への移牧が報告されている（High Plains Journal, Nov 26, 2000）。このことから両山地への放牧は25年以上継続されていることを意味する。

サンタクララ大学で法学士の資格を取った息子のドミニクは、2001年サクラメント市での仕事を辞め、父親のダイヤモンド牧羊社に加わった。

そして現在、カーン郡羊毛生産組合の組合長をしている。

(3) アンソラベヘーレ牧羊社

(Ansolabehere Sheep Co.)

アンソラベヘーレ牧羊社は本部をバイカーズフィールド南東部のファリファクス通りにある。この牧羊社は、11月から2月半ばまで羊をアルファルファ畑へ放牧した後、タフト周辺の自然草地に放牧する。4月から6月はモハーベ砂漠に放牧され、7月から9月半ばまでビショップの北のインニヨ国有林(2,000~2,200m, 2,400~3,200m)に放牧される。これは前述のノリエガ牧羊社の放牧地を継承したものである。山地放牧の地は1981年当時のビショップの北東のホワイトマウンテン山麓から、モノ湖とクローレイ湖の間のインニヨ国有林に変わった。2008年9月に訪ねたところ、羊は確認されなかったが、州道120の端に常設のキャンプ地が認められた。この山地放牧の後にアーヴィンのブドウ畑に放牧するという⁷⁾。これは1981年当時と変わっていない。

(4) ヘイ兄弟放牧社 (Hay Bros Sheep Co.)

カーン郡の牧羊者の中でバスク人系以外のはヘイ兄弟牧羊社のみである。彼らはスコットランドとドイツから移民の子孫であるという。羊が好きで、1972年に羊産業に参入した。デックとダニエルの兄弟のうち、ダニエルの本業はバイカーズフィールドのフォード自動車販売代理店の会長である。放牧するアルファルファ畑は、牧場の本拠のあるセブンススタンダード道路の西部にあるが、丘陵の放牧地はエルクヒルとカーン川下流とバイカーズフィールド北東部の石油会社の土地からなる。そしてモハーベ砂漠への放牧の後、羊は山地に長距離移牧される。一つはカリフォルニア州北部のモドク国有林であり、もう一つはヨセミテ国立公園の北の国有林である。前者はバイカーズフィールドから高速5号線で500マイル強、

後者は400マイル弱ある長距離移牧である。このヘイ兄弟牧羊社の特色は、毎年更新用の雌羊1,400頭をワイオミング州のグレットから購入していることである。子羊はパイヤーを通じ、コロラド州のフィードロットに販売するという⁸⁾。

(5) ユーリカ畜産社 (Eureka Livestock LLC)

前述のERE牧羊社は、1947年ネバダ州ユーリカ郡に放牧地を購入し、夏ネバダ州の牧場で過ごすことを慣例とした。このネバダ牧場は、1995年ダイヤモンド肉牛牧場 (Diamond Cattle Co.) とユーリカ畜産社に分離した。前者は20万エーカーの土地に牛を放牧している。後者も13万エーカーの土地に600頭の肉牛を放牧し、加えてカーン郡南部のマリコパに150頭の肉牛を放牧している。ニックエチベリーが継いだユーリカ畜産社が羊の長距離移牧を現在まで続けている。

しかし、長距離移牧とはいえ、その形態は若干変形した移牧といえる。つまり、本拠地の盆地床のアルファルファ畑放牧(10月25日~2月15日、標高80~90m)から盆地を取り巻く丘陵地の自然草放牧(2月15日~4月10日、標高100~700m)を経て、直接ネバダ州北部のエーカーイマ牧場(4月10日~6月30日、1,800~2,400m)とフンボルト・トイヤベ国有林(7月1日~9月25日、2,100~3,100m)に移動するからである。この国有林放牧の後、ユーリカ郡のユーリカ市の北のダイヤモンドバレーのアルファルファ畑(9月25日~10月25日=借地、2,000m)に放牧する(図4b)。このアルファルファ畑放牧地はロバート山地の西側の同社の肉牛放牧地に近接している。また、ユーリカ畜産社がモハーベ砂漠の放牧を抜いているのは、そこへの放牧が植生の劣化で3年に1度の割合になるからである。なお、この日にちは、ほぼ目安であり、ネバダ州からサンホワキンバレーの盆地床に四段詰のトラックで250頭ずつ運ぶので、合計20回、11月5日までかか

るという⁹⁾。このネバダ州のエルコの北の放牧地からシエラネバダ山脈の東麓を通り、ベイカーズフィールドのアルファルファ畑までの道路距離はハイウェイ経由で700マイルに近い。

(6) テホン牧羊社 (El Tejon Sheep Co. Inc.)

レオナードビッダルトの牧羊会社は1930年代から農業へ進出し、息子のジョンとフランクがそれを担った。レオナードはテホン牧羊社の社長になり、長男のジョンも協力していた。1960年代レオナードがマッキトリックの牧場で羊を監視している写真が残っているが (Paquette, 1982), そこは1977年から肉牛の飼育に乗り出した。羊部門は1993年からメルチョロ・グラギレナとの共同経営となり、2007年からメルチョロの単独経営となった。

長距離移牧先は、ネバダ州北部、エチェベリー氏の放牧地の西のフンボルト・トイヤベ国有林のうち、インディペンデンス山地の西麓、ブルーマウンテン山地の西麓にある。そこのジャッククリークとスノーキャニオンの指定地にそれぞれ1,200頭の雌羊が7月1日から9月30日まで、ホワイトジャケットとブルージャケットおよびコロンビアベースンの指定地に7月1日から10月10日まで放牧が認められている。ベイカーズフィールドからここまでは優に700マイルを超えている長距離移牧である。

(7) エチエニク牧羊社

(Echenique Sheep Co.)

スペインのマヤから1987年に渡米し、ミラーアンドラックス社の羊飼いを行った後、独立した牧羊社を始めたトーマスエチエニクはアルルーデス出身のジャンヌエチェベリーと1908年に結婚し、それぞれの弟のミゲールも妹のマリーリスと1911年に結婚した。マッキトリックにミラー社から羊の放牧地を買ったクレメンテガライネナ氏もトーマスの援助で渡米したという

(Paquette, 1982)。このように同社は代々牧羊業に携わってきた名門牧羊社である。アルファルファ畑で羊を世話していた牧童によると同氏は2,000頭の雌羊を、丘陵の自然草地に放牧し、モハーベ砂漠からビショップの東のネバダ州に入ったところに連れていく長距離移牧を行っている。

以上のような長距離移牧の移牧先をまとめて図示したのが図5である。移牧先は概して北の国有林であるが、A&F牧羊社とダイヤモンド牧羊社の一部が南のテハチャピ山地とエンジェルズ国有林を利用している。

2) モハーベ砂漠移牧業者

(1) マリトレナ牧羊社 (Jose Maritoren Inc.)

ベイカーズフィールド南部のタフトハイウェイにある本拠でホセマリトレナ氏に伺ったところ、彼は山地放牧を行っていないという¹⁰⁾。11月から2月のアルファルファ畑で子羊の出産後、自然草地への放牧を経てモハーベ砂漠に放牧する。2010年3月にモハーベ砂漠で2,000頭の羊を放牧していたペルー人の牧童によると、主人は6,000頭の子羊を5月にテキサスの業者に1頭140ドルで売るといふ。羊を放牧していたのはモハーベ砂漠といっても、ロサンゼルス郡のランカスター西部の自然草地で、エンジェルズ国有林に近いところであった。また、一旦耕地にされ、放棄された農地にもマリトレナの羊群が見られた。

(2) ゴイネッチ牧羊社 (Juan Goyeneche)

3,000頭の羊を飼育するフランス系バスク人のゴイネッチ氏は、モンタナ州で羊飼いを行った経験を有するが、チノ市での酪農経営に転身した。チノバレーの都市化に押され1995年にカーン郡に移転して3カ所に大規模酪農を展開している (斎藤, 2006)。その彼が羊の放牧業を兼営しているのである。彼の羊は冬季タフトハイウェイに沿ってパンプキン周辺アルファルファ畑に放牧されていた。夏季にモハーベ砂漠のカリフォル

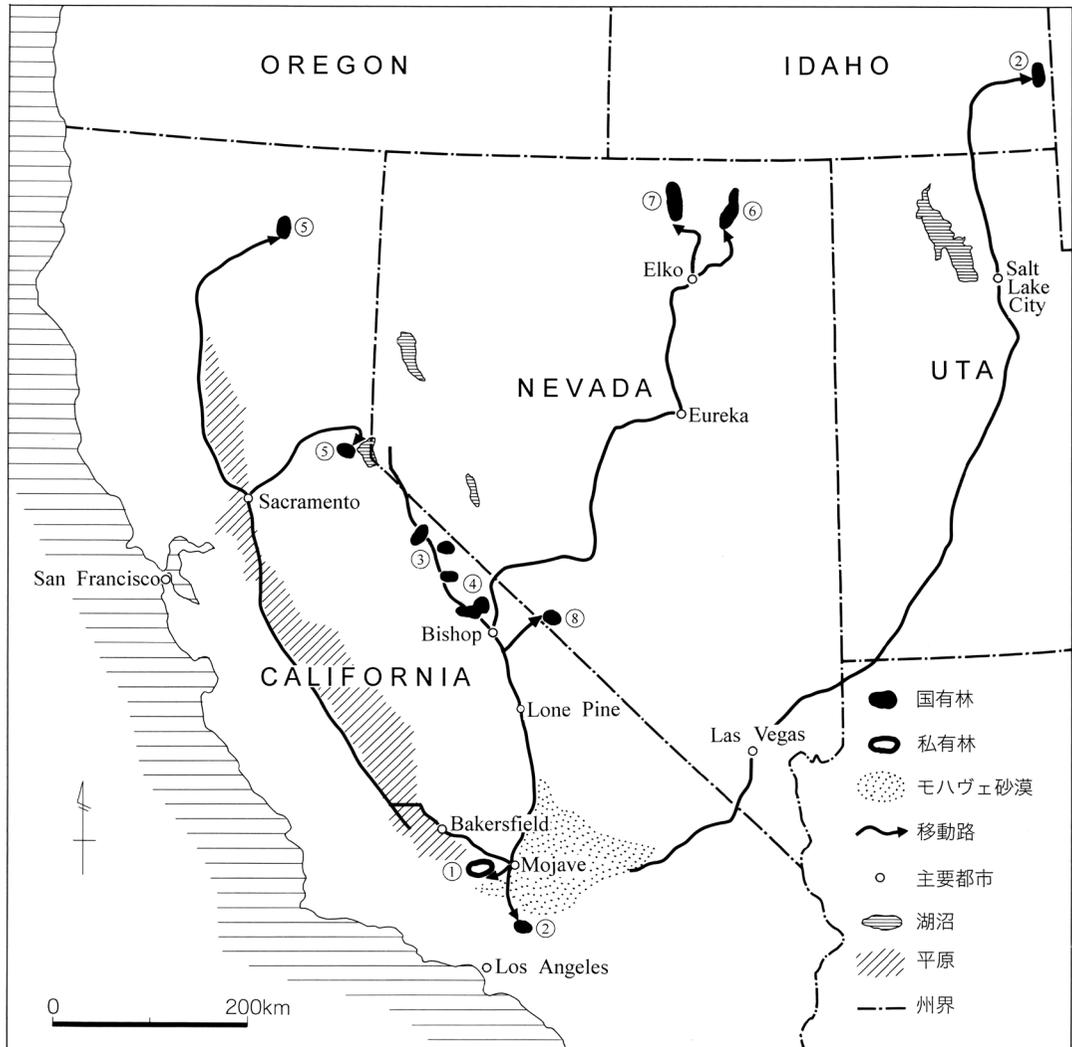


図5 カーン郡から羊の長距離移牧先

①～⑧は、第2表に対応する。

(聞き取りにより作成)

ニア市の周辺に放牧するというので、丘陵地の自然草地を加え、3カ所移牧といえよう。

(3) ダブルエム牧羊社 (Double M. Sheep Co.)

経営者のホセメンディブル氏は、前述のメンディブル畜産社とは関係がないといていた。2,000頭の雌羊をセブンススタンダード道路のアルファルファ畑に11～2月に放牧していた。そして丘陵の自然草地で放牧した後、マリコパから南

西にサンアンドレアス断層を越えたクヤマバレーに5月から10月まで羊を放牧するという¹¹⁾。クヤマバレーの標高は800～900mでモハーベ砂漠より湿潤である。

(4) ホルヘ (Jorge)

バイカーズフィールド南部のベアマウンテン通りでペルー人のホルヘという小規模な牧羊業者に会った。彼は500頭の雌羊をアルファルファ畑に

放牧していた。放牧地は、子羊を産んだ親子、子羊の出産期にあるもの、子羊を産んでいない群れに分かれていた。雌羊は2頭の子羊を産むので、雌羊と合わせて1,500頭の所有者になるという。アルファルファ畑の借地は11月から1月の3カ月使用、ついで2月から4月の3カ月はマリコパの自然草場で、5月から7月の3カ月はタフト周辺の草場に放牧し、8月から10月の3カ月は、ランカスター周辺のモハーベ砂漠で放牧するという¹²⁾。

彼の所有物は1台の小型トラックで、放牧地内の小さな小屋に2匹の牧羊犬と住み、自らをペルーのヨーマンと呼んでいた。この羊飼いは表2に載せてはいないが、かつてのバスク人が羊飼いやから羊を所有し、牧羊業者になったようにペルー人が自ら羊飼いやから牧羊業者になる過程にあるとみることができよう。

3) 定住放牧業者

(1) エチャメンディ牧羊社

(Echamendy Sheep Co.)

マーチンエチャメンディ氏はバスク地方から1962年移民してきたという (LAT, Aug 26, 1989)。4,000頭の羊を所有し、5人のペルー人が世話している。4,000頭の羊は1,000頭ずつ、四つの群れに分かれて1人の羊飼いやが世話する。もう1人は、その群れにタンク車で水や必需品を運んだりする。羊飼いやの1人ペドロによると、11月から1月末までは盆地床のアルファルファ畑に放牧される。そして2月から4月まで盆地周辺の丘陵地で放牧される。そして夏5月から10月は再び盆地床のロストヒルズとその東部の低湿地で放牧されるという。この地区では刈跡放牧もあるが、自然の草地も存在する。高速5号線に沿って洪水の受け手であるカーン川水路が走っているが、その沼沢地は自然のままにされていることが多い。乾燥した夏にロストヒルズの東の乾燥した沼沢地で見かけた羊群は、彼のものだと確認された。

(2) エスノス牧羊社 (Joe Esnoz)

4,000頭の雌羊を飼育するエスノス氏によると11月から2月のアルファルファ畑放牧後、3月から6月初旬にかけて石油会社の自然草場で放牧する。6月中旬から10月末までは、小麦などの穀物畑の収穫後に刈跡放牧する。子羊は5月から6月にかけて食肉会社に販売するという。カリフォルニア州に本拠のあるスーベリアー食肉会社があげられた。息子のフィリップも父親と同様、同じ地域で牧羊業 (Phillip Esnoz) を続けている¹³⁾。

(3) アイヘラバイデ牧羊社 (Ray Eyherabide)

土地持ちでマリコパに牧場のあるアイヘラバイデは未亡人が牧場を守り1,500頭の羊を飼育しているという。マリコパの南の土地は天然の牧草場で、地籍図によると3,000エーカーに上る。

3. 羊の放牧業者の変容

1) ビッドルトブラザーズ農場

(Bidart Bros Farms)

テホン牧羊社を経営していたレオナードビッドルトは1930年代から農業へ進出し、土地の集積を図った。サンホワキンバレーの西側のマッキトリックの羊の放牧地に加え、盆地床での農作物や果樹栽培に力をいれた。すなわち、マッキトリックの放牧地は1977年から肉牛の素牛を生産する、ビッドルトブラザーズウェストサイド牧場となった。面積が6万エーカーあるというので、地積図をみるとカーン郡に約8,300エーカーとあるので、隣接するサンルイスオビスコ郡により広大な放牧地を有することになる。ここには肉牛が牧草の状況により500~1,000頭放牧される。少なくとも肉牛1頭当たり40エーカーの土地を割り当てるといえる。このなだらかな放牧地で12~18カ月放牧された肉牛は、ネブラスカ、コロラド、カンザス、テキサス州のフィードロットに販売される (斎藤・矢ヶ崎, 1998)。肉牛のビデオを撮り、ネッ

トオークションで売買されるという。つまり、ビデオマーケットの状況を見て販売先が決まるという¹⁴⁾。

一方、80年以上の歴史のあるビッグルトブラザーズ農牧場は、地籍図によると本部のあるセブンススタンダード道路の北に集中し4,800エーカー、ベイカーズフィールド南部の99号線の両側に3,700エーカー存在する。前者の土地にはアルファルファや綿花、アーモンドが栽培されていた。アルファルファ畑の一部にはI&M牧羊社の羊群が放牧されていた。後者には、食用ぶどう、オレンジなどの果樹に加え、パレイショなども栽培されていた。カーン郡の有力な農企業といえる。

2) メンディブル農牧社

(Mendiburu Land and Livestock Company)

伝統あるメンディブル牧羊社は、元羊飼いであったバスク人と共同経営の牧羊社を次々設立して羊産業を支えてきたが、ジョウメンディブル氏の高齢化とともに共同経営を解消し、肉牛の素牛生産に転身した。事務所は最初に農場のあったノリス道路に面して存在しているが、肉牛牧場はロストヒルズの西、ビターウォータークリークを入ったところにある。地籍図の面積は、10,688エーカーで、全くの素牛生産牧場になった。

3) バーナル牧羊社 (Bernal Sheep Co.)

スペインのピレネー山地の15軒ほどの村アリツカム生まれのバーナル3兄弟は、1950年代に17歳の誕生日を過ぎると叔父の羊産業を手伝うため渡米した。当初は現在のようにトラックではなく、歩いて羊をモハーベ砂漠、ビショップと高地につれていった。アルハンドロ、フランシスコ、ニコラスの3兄弟は、フランクノリエガ氏と共同して1980年にバーナル牧羊社を立ち上げた。また兄弟は、アルファルファ、トウモロコシ、綿花、

小麦を栽培するバーナル農場を経営した。

「州の釣り狩猟委員会が砂漠亀を絶滅危惧種に指定したことを受けて、政府はその保護のため、モハーベ砂漠の羊飼いが使ってきた1,200万エーカーを保護地に設定した。このことが牧羊業者に脅威を与えている。牧羊業者が伝統的に使ってきた放牧地からしめだされるようになったら、私には砂漠で何が起きているかわからないが羊飼いを止めるだろう」とアルハンドロは語った (BC, Sept 20, 1989)。しかし、5年続きの寡雨と干魃でビショップやモノ湖周辺の山地での放牧地が減少したことを述べた後で、「先週の雨で盆地床周辺の放牧地やモハーベ砂漠の飼料の成長が期待できる」という談話とともにニコラスとパトリシア・バーナル氏の羊の毛刈りの様子を載せている (BC, Mar 10, 1991)。このバーナル牧羊社に対する農業個別補償の直接補助金 (EWG) は2001年まで支払われているので、以後牧羊業を止めたと思われる。つまり、後継者がいないことに加え、山地の国有林放牧地の減少、モハーベ砂漠の放牧地の減少が羊の放牧から撤退させた原因だろう。

ベイカーズフィールドを拠点に隣接のサンルイスオビスコ郡とネバダ州のユーリカ郡の郡都ユーリカの東、ダイヤモンド山地に放牧地をもって長距離移牧をしていたララルデ牧羊社も後継者の不足により2005年までに止めてしまった。

V 長距離移牧の順路とイベント

1. 盆地床のアルファルファ畑放牧

これまでみてきたように11月はじめから2月半ばまで、羊はサンホワキンバレーの盆地床のアルファルファ畑に放牧される。例えば6,000頭の雌羊を栄養の富んだアルファルファ畑に放牧する場合、7群に分ける。一つの群れ (バンチ) は820~830頭からなる。この時期は、子羊の出産期 (Lambing season) で羊の所有者は目を離せない

多忙な時を送る。多くの雌羊は2頭の子羊を生む。したがって、アルファルファ畑への放牧（図6）は、一つの群れが雌羊に1,000～1,200頭の子羊が加わるので約2,000頭になる。平均的な雌羊は6年で12頭を生むという。生まれて間もなく、オスの子羊は虚勢され、尻尾を切られる。子羊の虚勢は歯でかみ切る（バイティング）もので、オーナーが行うものだという¹⁵⁾。

アルファルファ畑への放牧は1日、1バンチ当たり5エーカー必要であるという。80エーカーの土地は16日で食べ尽くされてしまう。3カ月半に及ぶアルファルファ畑への放牧は1バンチ当たり約560エーカー必要である。これが7バンチだと4,000エーカー弱必要とされる。1エーカーの借地料は20～25ドルであるので、借地料は莫大な料金となる¹⁶⁾。

アルファルファ畑への放牧では、牧柵を設置しなくてはならない。5エーカー（2ha）の放牧地には網のように編んだ古いタイプの牧柵もあるが、電柱の電線や太陽電池利用の電牧柵まである。また1バンチ毎に1人の羊飼、寝泊まりする古いトレーラーハウス、給水トレイなどが必要である。I&M牧羊社の場合、7つのバンチの管理に、8人のペルー人と1人のバスク人（manager）



図6 羊のアルファルファ畑放牧（羊の親子）
（2007年12月20日撮影）

が当たる。1人は給水タンク車で7つのバンチに給水する作業に当たる。

4,000エーカーに及ぶアルファルファ畑は、I&M牧羊社の場合30軒の土地所有者と借地契約している。私有地の広さは40エーカーから1,200エーカーまでであるという。したがって、牧羊会社の所有者はアルファルファ畑の借地を手配し、それをどのような順序で放牧していくかを計画して行かなくてはならない。また、畑が離れている場合には四段からなる羊専用のトレーラー車で羊を移動させる必要がある。

とはいえアルファルファ畑放牧地は、家畜の移動距離を少なくするため代々受け継がれてきた傾向がある。イツリリア兄弟が経営しているI&M牧羊社とA&F牧羊社はウォスコ西部一帯とハイウェイ46号線沿いおよびセブンススタンダード道路にある。ダイヤモンド牧羊社の放牧地はシャフター周辺にあり、ハイ兄弟牧羊社の放牧地は牧場本部のあるセブンススタンダード道路の西部にある。一方、ユリカ畜産社の放牧地は伝統的にボタンウィロウ地区にあり、テホン牧羊社はベイカーズフィールド南西部の115号線周辺に見かけ、アンソラベヘーレ牧羊社はその南のベアマウンテン通りにある。もちろん、その他を含めアルファルファ放牧地は重なり合っているといえる。

それぞれの放牧圏は図示できなかったが、牧羊社の所在地と主要なアルファルファ畑の分布を示したのが図7である¹⁷⁾。アルファルファ畑は、サンホワキンバレーの盆地床にある（斎藤・仁平、1996）。図7のように丘陵地や山麓部は自然草地の放牧地となっているが、その多くは、肉牛の繁殖牧場になっている。また、東西の扇状地面や台地面には柑橘、アーモンド、ブドウ、ピスタチオなどの樹園地が広がり、拡大を続けている。したがって、アルファルファ畑は縮小しつつある。一方、盆地床の低地部はかつての沼沢地が残り、

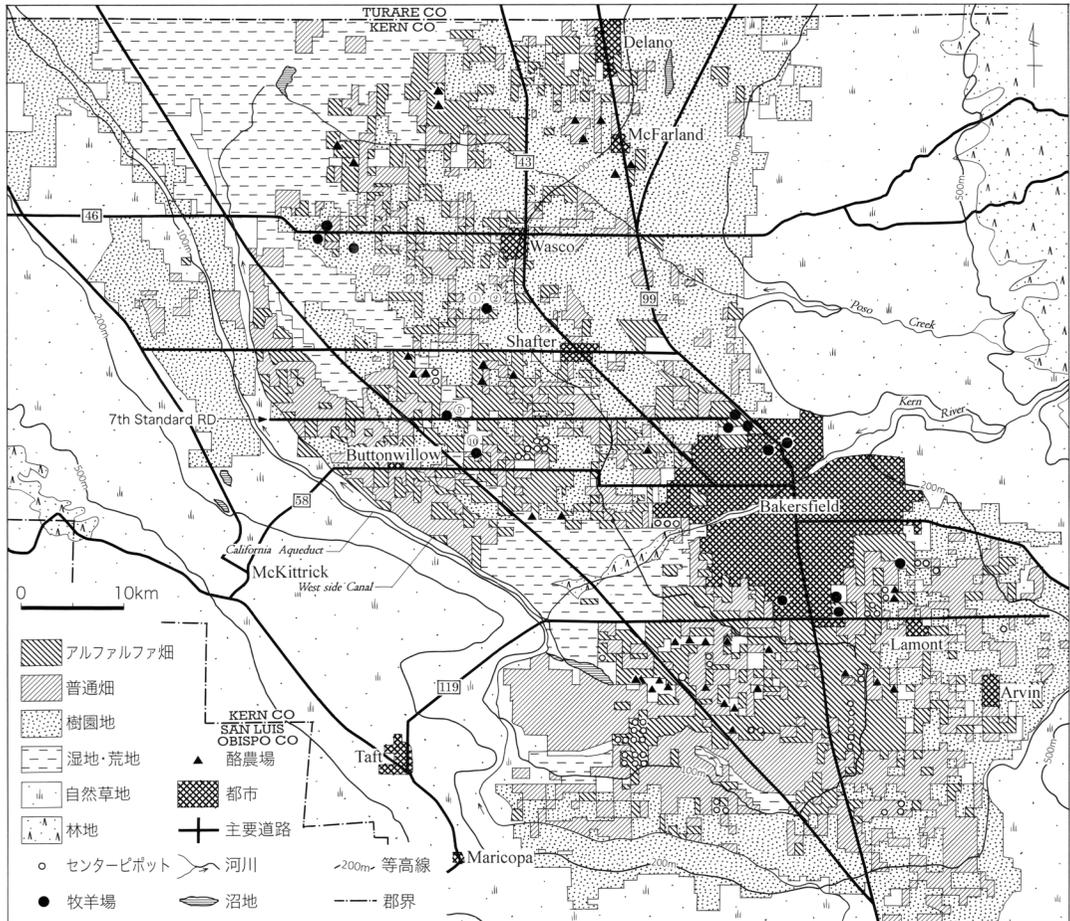


図7 牧羊社・アルファルファ畑・自然草地の分布
(Google Aerial Map (2011年4月30日) および筆者の羊の放牧地目撃地図により作成)

狩猟クラブなどに所有され、耕地にされないまま荒地が残っている。そのような場所は移牧を行っていない牧羊社の夏の放牧地として利用される。さらに、盆地床の平坦部はバレイショ、ニンジン、タマネギ、カリフラワー等の野菜畑が広がるが、小麦畑や綿花畑等に刈跡放牧されることがある。

2. 丘陵地の自然草地への放牧

サンホワキンバレーの南部は三方が低い丘陵地に囲まれている。カーン郡西部にはサンアンドレ

アス断層に平行して丘陵と谷間の褶曲地形が続く。西部丘陵のロストヒルズ、エルクヒルズ、ブエナヴィスタヒルズ等の丘陵等は石油開発に当てられてきた。東部でもシエラネバダ山脈の山麓部150～500mの波状地形のところていくつかの油田が開発され、現在盛期は過ぎたものの、稼働しているところもある。したがって、丘陵地の多くは現在でも石油会社やカーン土地会社の後継のテネコ社等の土地である。これらの土地は、2月の半ばには、青々とした緑の野辺となり、家畜の格好の放牧地となる(図8)。I&M牧羊社の



図8 自然草地に到着した4段からなる羊の輸送車（左の写真）と自然草地に散開する羊群（右の写真）
(2009年2月16日撮影)

場合、西のロストヒルズのシェブロン社の土地6,000エーカーとマッキトリックのテキサコ社の土地4,000エーカーを借りて放牧している。借地料は年1エーカー当たり、3ドルであるという¹⁸⁾。1バンチの羊群は1日20～40エーカーの自然草を食べる。

自然草地での放牧の時期は、毛刈のシーズンである。例えば15人のクルーを率いるゴンザレスの下で30年間羊毛を刈り続けて来たバルガスをみよう。「彼は15人のクルーの一員として、2月半ばから4月半ばまでカリフォルニアを1,500マイル移動する渡り職人である。160～170ポンドの雌羊、200～250ポンドの雄羊を扱うので、体力がいる。1頭刈るのに5分前後、1日平均80～90頭の毛を刈るが100頭を越える人もいる。毛刈職人は1頭当たり1.25ドルの取り分があるが、牧羊社はゴンザレスに40～50セントを支払うので、1頭当たり1.80～2.00ドル支払うことになる。ゴンザレスは電気バリカンを動かす発電機や羊毛32頭分を袋（325ポンド）に詰め込む圧搾機等を準備しなければならない。ランブイエ種の羊毛の値段は良いので、牧羊業者は羊毛1ポンド当たり1.00～1.10ドルで売ることができる（BC, Mar 22, 1981）。

筆者もベイカーズフィールド北東部のヘイ兄弟牧羊社の放牧地（Kern Front Oilfield）で毛刈りを見ることができた（図9）。700頭の雌羊と900頭の子羊1,600頭の毛を刈るのに、8人の毛刈職人で9時から1時までの4時間かかった。刈り終わった羊には20頭ずつ、HBのマークが消毒剤入りの緑色のペンキで付けられていた。この群れに誘導羊は3頭おり黒色で首に鈴を付けていた。同じ日にウォスコの東部、シエラネバダ山麓の丘陵地でA&F牧羊社の羊群でも毛刈りが行われていた。ここの毛刈クルーはニュージーランドからの出稼ぎで2月末から3か月間羊の毛刈りを行うという。毛刈職人は6人で11人のクルーから成り立



図9 ベイカーズフィールド北東部の羊の毛刈りキャンプ（石油会社の所有地）
(2010年3月9日撮影)

ち、A&F牧羊社の毛刈りだけで18,000頭に上るので10日前後かかるという。

3. モハーベ砂漠

モハーベ砂漠も冬の雨と気温の上昇で「砂漠は放牧地」に変わる。3月初めには灌木の下草が萌え花をつけるが、灌木も青みを帯びてくる。4月初旬から5月末にモハーベ砂漠が羊の放牧地になるのである。I&M社の場合、カリフォルニアシティー（標高700～840m）の周辺に40,000エーカーの放牧地を確保している。私有地の場合、1日1エーカー当たり1.1ドルの借地料が必要であるが、公有地の場合、雌羊5頭単位で1カ月2.65ドルである。全体の1/3は公有地で、30年前の借地料は、1エーカー10セントであったが、現在は1ドル10セントに上がったという¹⁹⁾。

ユーリカ畜産社の放牧地は、モハーベ砂漠の北部、リッジレスト市の南西にあるが、植生状態が悪いため3年に一度しか使わないという。事実、灌木の合間は細かい砂地が多く下草がみられない状況であった。この植生の劣化に加え、前述のように環境保護論者の圧力が増したことにより、モハーベ砂漠への放牧頭数は減少している。そしてマリトレナ社のように放牧地としてロサンゼルス郡のモハーベ砂漠を選び、私有地（耕作放棄地）に放牧している場合もある。

4. 山地放牧

ノリエガ氏の伝統的山地放牧で述べたように、バイカーズフィールドの牧羊業者はシエラネバダ山脈の東部の山地に羊を放牧してきた。標高1,270mのビショップ市から北の標高2,000mのモノ湖周辺である。ここには現在でもアンソラベヘーレ牧羊社やI&M牧羊社が山地放牧している。I&M牧羊社の場合、放牧地はインニョ国有林とトイヤベ国有林の地区である。インニョ国有林

は土地管理局の管轄で、3つの公認放牧許可地：ジューン湖（1,500頭、7～8月の2カ月）、ホディー西部（3,000頭、7～9月の3カ月）、モノ湖南部（1,500頭、7～9月15日の2カ半月）であり、それぞれ放牧頭数と放牧期間が異なる。このことからイツリリア氏は6,000頭の雌羊を山地放牧していることが分かる。なお、これらの公認放牧地に合わせて個人の自然草地を借りることになる。これらの私有地は、1,200エーカーに及ぶ。公有地の借地料は砂漠と同じで、雌羊5頭単位で1カ月2.65ドルである。私有草地（Private Meadow）は2万～2万6千ドルであるという²⁰⁾。これらに加えてI&M牧羊社はブリッジポート周辺のトイヤベ国有林を借地している。ここにも800エーカーの個人所有の草地がついているが、その借地料は10,000ドルであるという。私が訪れたのは9月であるが、この草地には羊飼いが利用できる民家とコラルが付いており、放牧地に続いている。ここに公認放牧地の放牧期間が終わった羊群が移されてくる。ここでは6,000頭の雌羊は5つのバンチ、1,200頭ずつ放牧されることになる。基本的にはここでも1バンチ当たり牧童、キャンプ用の小型トレーラー、牧羊犬2頭である。雌羊たちは枯れた灌木や草の葉をパリパリとむさぼるように食べていた（図10）。

山地放牧では雄羊（Rams）が1バンチ当たり20～25頭放され、雌羊と交配させられる²¹⁾。したがって、雄羊は100～120飼育され、山地で羊群ごとに混牧されるのである。羊の混牧は2～3カ月続く。羊は交尾から妊娠4カ月で出産するので、アルファルファ畑に下ろした11月から出産するようになる。

次にネバダ州に放牧しているユーリカ畜産社の事例をみよう。ニックエチベリーの父親が所有していたユーリカ郡にある牧場（Three-Bar Ranch）は、若干の羊は存在するものの肉牛の素



図10 トイヤベ国有林での羊の山地放牧（ブリッジポート西部）

（2007年9月5日撮影）

牛生産牧場（600頭）に変わっていた。そこでサンホワキンバレー南端部の丘陵地（自然草地）から直接、ネバダ州北部のエルコ郡にある、イトカイマ牧場（1,800～2,400m）に4月1日から6月30日まで放牧する。ここは国有林といっても林地が少なく、ほとんどが藪や草からなる荒蕪地である。面積は125,000エーカーあり、借地料は5,000ドルであるという²²⁾。

ここでの最大のイベントは子羊を販売することである。放牧地内にある私有地バナウ草原で、6月20日から25日にコロラド州のラムフィードロット経営者マイクハーパーフィードロット（斎藤，2009）に4,000頭の子羊を売るのである。500頭は更新用に群れに残される。この頃には子羊といってもラムの体重は120～130ポンドあり、親と変わらなくなる。また子羊の頭数が少なくなる時期で、値段の一番高いときである。「昨年ラム価格は1ポンド1.15ドルであったが、今年は0.90～1.15間で推移している」という²³⁾。

7月1日から9月25日までその上流の国有林のマーレー川（2,100～3,100m）に放牧される。子羊のいなくなった雌羊群には雄羊が放牧され交配される。雄羊はバンチごとに20～25頭で同じ割

合で放牧される。そして、9月20日から27日に7日間かけて、放牧地からハイウェイ225号まで歩いて羊を移動させる。

羊は合流点で待っている羊運搬トレーラーに乗せられて、南のユーリカ郡のダイヤモンドバレーのアルファルファ畑に9月25日から12月5日に放牧される。ここはいわば、山地放牧と盆地床のアルファルファ畑の中間段階で妊娠羊に栄養をつける。ここに放牧された雌羊はベイカーズフィールド周辺のアルファルファ畑に下ろされる。エチェベリー氏がユーリカ郡のダイヤモンドバレーのアルファルファ畑に40日間放牧するのは、アンソラベヘーレ氏がアーヴィンのぶどう畑に放牧するのと同じで、四季放牧の変形とみることができよう。

羊をバトンウィロー近くのアルファルファ畑に下ろすのは、羊運搬トレーラーを使っても10月25日から12月5日まで10日間はかかる。羊の山上げの時は、トレーラーに290頭乗せていくが、山から下ろすときは、妊娠して雌羊は200ポンドになっているので250頭ずつ乗せるからである。

VI 結び

カリフォルニアにはメキシコ領時代から世襲の大牧場ランチョが存在したが、アメリカ領に編入されてからも大土地所有が卓越した。大土地所有者の荒蕪地の利用形態の1つとして羊の放牧が行われた。サンホワキンバレーの南部カーン郡は地中海式冬雨気候であるので、春先には緑の野辺となるが、夏にはカラカラに乾燥する褐色の世界となる。乾燥する夏季に羊を青々とした山の草地で放牧する、シエラネバダ山脈の峠を越える「大回遊移牧」が存在した。しかし、1890年の国立公園の設置と過放牧によって大回遊移牧は中止された。大土地所有者の羊群を世話する羊飼いとピレネー山地西部のバスク人が歓迎された。

シエラネバダ山脈の東麓のモノ湖周辺のインニョ国有林やネバダ州の高原が羊の移牧先として重要視された。そしてセントラルバレー盆地床のアルファルファ畑、周辺の丘陵地での自然草放牧、モハーベ砂漠の藪地放牧、シエラネバダ山脈東部の山地放牧という、片道400マイルに上る巡回型移牧が完成した。しかも、この羊の長距離移牧は独立したバスク人牧羊業者によって現在まで受け継がれ、ネバダ州北部やアイダホ州まで800マイルという長距離移牧さえ存在するのである²⁴⁾。アルファルファ畑での羊の出産と保育、丘陵の自然草地での毛刈り・放牧地の移動、モハーベ砂漠での放牧、山地放牧での羊の交配など過酷な労働が続く。

この羊群の管理に欠かせないのが羊飼いはバスク人であり、かつてバスクホテルを通じ連鎖移牧させた。しかし、1970年代からバスク地方の経済的好転とともに孤独で過酷な労働を要する羊飼いとて渡米する人はいなくなった。したがって、現在の羊飼いはバスク人からペルー人やチリ人などのヒスパニックに変わった。また、羊の放牧業者の収入は羊毛であったが、現在では羊肉ラムに重点が移った。子羊ラムもかつてイースターのため3月末に出荷されたが、5月、6月と親と変わらない大きさまで放牧され、コロラド州のラムフィードロットに販売されるようになった。

現在までバスク系アメリカ人による羊の長距離移牧は継続している。しかし、羊数、牧羊業者数は半減している。羊群の放牧が砂漠亀や植生に悪影響を与えているという環境論者の主張でモハーベ砂漠や国有林での放牧許可地が減少したことが主要な要因であるが、後継者がいないことも契機となる。また盆地床における果樹園や灌漑農地の増大が放牧地や刈跡放牧地の減少も牧羊業の衰退の一因であろう。

[付記]

現地調査ではパーコイツリリア、ニックエチエベリー、ダニエルヘイ氏などの牧羊業者のお世話になった。また、科研費基盤研究B「ロサンゼルス大都市圏における移民の適応戦略・エスノスケープと都市構造の動態」(研究代表者:矢ヶ崎典隆東京学芸大学教授)が契機となり、長野大学の地域研究・一般研究助成金(研究代表者:斎藤功 2010)でも3度の現地調査をすることができた(斎藤, 2010)。さらにベーカーズフィールドのビール記念図書館には古い地籍図や新聞の切り抜き閲覧等でお世話になった。本研究の一部は長野大学の「研究交流広場」および駒沢大学の「地理学サロン」で発表した。なお、製図は筑波大学の宮坂和人さんをお願いした。お世話になった方々に感謝する次第である。

本稿は、公益社団法人日本地理学会の「地理学評論」誌に論説として投稿され、修正の後に再投稿の準備途中にあった原稿を骨子としている。斎藤功会員のご遺族からの論文掲載依頼を地理空間学会編集委員会において慎重に検討した結果、ごく一部の修正を施した上で特別寄稿論文として掲載することを決定したものである。

注

- 1) グラニットステーションは、デレーノの後、「1883年にレオポルドヴァイネイグが駅馬車の停留所を購入して以来、主要な毛刈り地となった。彼は、羊の毛刈り小屋、羊が水を飲む長い水場、馬小屋を装備し、羊飼いの利用するレストラン、バー、ホテルを建て、何年も経営をした。毛刈りの時期は羊飼、毛刈り人、羊毛の買付人と鉄道のあるデレーノまでの運び人が集まった。盛期には羊の毛刈りキャンプを廻り、毛刈り人の儲けを巻き上げるプロのギャンプラーも加わった。毛刈り人は羊毛を袋に詰め5セントをもらう。優秀な毛刈り人は50頭分、2.5ドルも稼いだ」という(Powers, 2007)。
- 2) ピレネー山地はバスク人による移牧の原郷といえる。そこでは移牧の組織が変質しつつも現在まで存続しているという(Ott, 1981)。
- 3) このようにしてアメリカに住むバスク人口は西部州に多い1990年のバスク47,956人のうちカリフォルニア州19,122人、アイダホ州5,587人、ネバダ州

- 4,840人, オレゴン州2,257人, ワシントン州1,780人, ユタ州1,422人が主なものである。
- 4) I&M 牧羊社の Frank (Paco) Iturriria 氏からの聞き取りによる (2006年12月20日)。
 - 5) P&A 放牧社の Freddy Iturriria 氏からの聞き取りによる (2009年2月16日)。
 - 6) ダイヤモンド牧羊社。Sebastian Minaberrigari 氏の奥さんからの聞き取りによる (2009年2月18日)。
 - 7) アンソベヘレ牧羊社の Ben Ansolabehere 氏からの聞き取りによる (2007年9月3日)。
 - 8) ヘイ兄弟牧羊社の Daniel Hay 氏からの聞き取りによる (2010年3月7日)。
 - 9) ユーリカ畜産社の Nick Etcheverry 氏からの聞き取りによる (2009年2月16日)。
 - 10) Jose Maritrena 氏からの聞き取りによる (2007年12月21日)。
 - 11) ダブルエム牧羊社の Jose Mari Mendiburu 氏からの聞き取りによる (2009年2月15日)。
 - 12) Jorge 氏からの聞き取りによる (2006年12月17日)。
 - 13) エスノス牧羊社の Joe Esnoz 氏からの聞き取りによる (2010年3月7日)。
 - 14) ビッドルト兄弟農牧社の ウェストサイドランチの Dean Thompson 氏からの聞き取りによる (2009年2月16日)。
 - 15) 記録ビデオ (Sheep & Wool Industry in San Joaquin Valley) と ユーリカ畜産社の Nick Etcheverry 氏によって確認 (2010年3月9日)。
 - 16) I&M 牧羊社の Frank (Paco) Iturriria 氏からの聞き取りによる (2007年12月20日)。
 - 17) 空中写真からアルファルファ畑を判別するのは難しいが, 自然草地, 盆地床の沼沢地は比較的容易に判断できる。また果樹園は空中写真を拡大することによって判別できる。アルファルファ畑の判別は, 2003年7月に実施したバイカーズフィールド土地利用図 (未発表) と羊の放牧地目撃地図をあわせて判断した。
 - 18) 前掲16) による。
 - 19) 前掲16) による。
 - 20) 前掲16) による。
 - 21) アリゾナ州のカーザグランデのジョウアウザ牧羊社に, カイバブ国有林のウィリアムズ支部が送った文書には, ビッグスプリングで2,000頭の雌羊 (6月1日から9月30日) に対して, 雄羊 (Rams) 50頭 (6月1日から6月30日), カウボーイタンクには雌羊1,016頭に雄羊30頭, ツインタンクに雌羊1,025頭に雄羊30頭の割合で, 放牧許可が出されて
- いる。したがって, 雌羊1,000頭当たりの雄羊の放牧頭数は25~30頭といえるだろう。
- 22) 前掲9) による。
 - 23) 前掲9) による。
 - 24) バイカーズフィールドから夏に北上して山地放牧するのは逆に夏に南下する長距離移牧も行われていた。すなわち, アイダホ州のルッペルトに本拠のある CP Ranch は, 夏の間 (7~10月), 東部のカリブー・タルジー国有林に放牧するが, 冬季の11月から3月までコロラド川の沖積地, アリゾナ州パーカーバレーのアルファルファ畑に放牧し, 出産するという長距離移牧が認められた (2009年2月19日)。

文 献

- 漆原和子 (2012) : 『ヒツジの移牧 - 東東南部における社会体制の変革に伴う変貌 -』 科研費報告書 (法政大学)。
- 斎藤 功 (2006) : カリフォルニア州カーン郡への大規模酪農の流入と進出形態. 人文地理学研究 (筑波大学), **30**, 11-39.
- 斎藤 功 (2009) : インペリアルバレーにおけるヒツジのアルファルファ畑放牧. 立教大学観光学部紀要, **11**, 25-38.
- 斎藤 功 (2010) : アメリカ西部におけるヒツジの長距離移牧に関する文化地理学的・実証的研究. 長野大学紀要, **32**, 191-192.
- 斎藤 功・仁平尊明 (1996) : カリフォルニア, サンホワキンバレー南部の農業的土地利用パターン - カーン郡の事例 -. 人文地理学研究 (筑波大学), **20**, 271-290.
- 斎藤 功・矢ヶ崎典隆 (1998) : ハイプレーンズにおけるフィードロットの展開と牛肉加工業の垂直的統合. 地学雑誌, **107**(5), 674-694.
- 白坂 蕃・鷲山恭彦 (2006) : イタリア北部フェアナークト村におけるヒツジの移牧. 立教大学観光学部紀要, **8**, 1-26.
- 渡辺和之 (2009) : 『羊飼いの民族誌 - ネパール移牧社会の資源利用と社会関係』 明石書店.
- 矢ヶ崎典隆・斎藤 功・菅野峰明編著 (2003) : 『アメリカ大平原 - 食糧基地の形成と持続性 -』 古今書院 (日本地理学会海外地域研究叢書3).
- Boyd, W. H. (1973) : *A Climb through History: From Caliente to Mount Whitney in 1889*. The Havilah Press.
- Boyd, W. H. (1997) : *Lower Kern River Country 1850-1950: Wildness to Empire*. Kern County Historical

- Society.
- Brown, H. (1969) : Sheep in the Mountain. *Los Tulares*, 80, 1-4.
- Douglass, W. and Bilbao, J. (1975) : *Amerikanuak. : Basque in the New World*. University of Nevada Press.
- Douglass, W. (1977) : The Basques of the American West. *Nevada Historical Society Quarterly*, 20, 13-25.
- Dull, R. (1999) : Palynological evidence for 19th century grazing-induced vegetation change in the southern Sierra Nevada, California, U. S. A., *Journal of Biogeography*, 26, 899-912.
- Falconer, M. (1963 and 64) : Life on a Sheep Ranch. *Los Tulares*, 59, 1-2. 60, 1-4.
- Graves, A. R. (2004) : *The Portuguese Californians: Immigrants in Agriculture*. Portuguese Heritage Publications.
- Hofmeister, B. (1961) : Wesen und Erscheinungsformen der Transhumance. *Erdkunde*, 15, 121-135.
- Liebman, E. (1983) : *California Farmland: A History of Large Landholdings*. Rowman & Allanheld, New Jersey.
- Morgan, W. M. (1914) : *History of Kern County, California*. Historic Record Company California.
- Ono, Y. and Sadakane, A. (1986) : Natural Background of the Yak Transhumance in the Langtang Valley, Nepal, Himalaya. *Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University*, 21, 95-109.
- Ott, S. (1981) : *The Circle of Mountains: A Basque Sheepherding Community*. University of Nevada Press.
- Paquette, M. (1982) : *Basques to Bakersfield*. Kern County Historical Society.
- Peattie, R. (1936) : *Mountain Geography*. Harvard University Press. 奥田彥・上野福男 (1955) 訳『山地地理学』農林協会.
- Powers, B. (2007) : *Kern River Country*. Bear State Books.
- Rinschede, G. (1988) : Transhumance in European and American Mountains. in *Human Impact on Mountains*. Edited by Allen, N. Knapp, G. and Stadel, C., Rowman & Littlefield Publishers, 96-108.
- Shirasaka, S. (2007) : The Transhumance of Sheep in the Southern Carpatians Mts., Romania. *Geographical Review of Japan*, 80-5, 94-115.
- Urushibara, K. (2006) : *Changing Social Conditions and their Impacts on the Geoecology – Transhumance Regions of Romania and Slovenia* – 科研費報告書 (法政大学).
- Wentworth, E. (1948) : *America's Sheep Trails*. Iowa State College Press.
- White, L. (1926) : Transhumance in the Sheep Industry of the Salt Lake Region. *Economic Geography*, 2, 414-425.